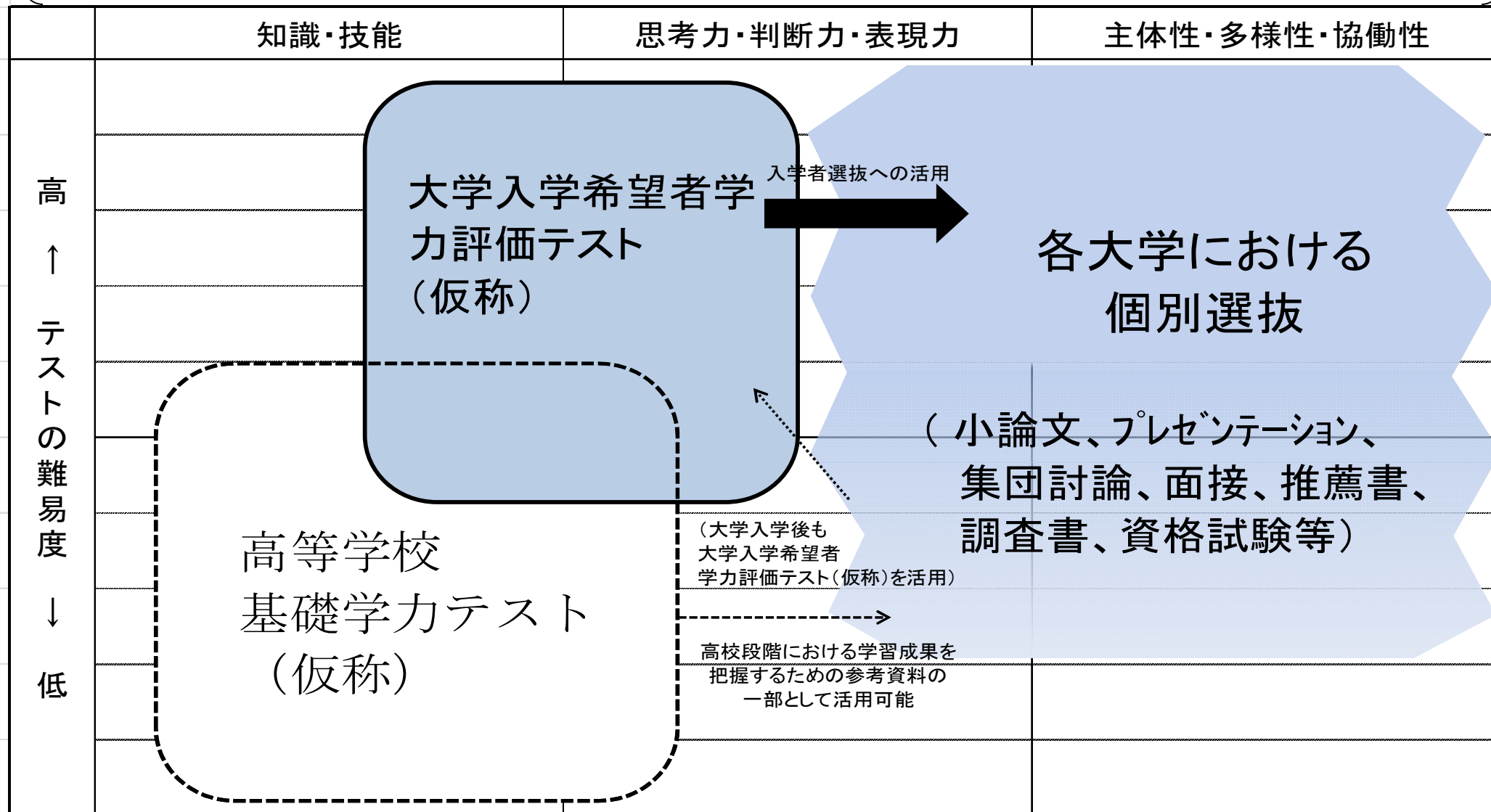


大学入学者選抜について

「高等学校基礎学力テスト(仮称)」と「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の 難易度と大学入学希望者選抜への活用方策イメージ

一般入試・推薦・AO入試の区分を廃止し、入学希望者選抜全体において、
アドミッション・ポリシーに基づき大学入学希望者の多様な能力を多元的に評価する選抜へ抜本的に改革



■ 大学入学希望者選抜のための仕組み。
⊞ 高校教育の質の確保・向上のための仕組み。

大学入学者選抜の現状

【大学入試の基本的な考え方】

大学がどのような選抜でどのような入学者を受け入れるかについては、各大学・学部等の入学者受入方針に基づき実施するものであり、各大学においては、入学者受入方針に基づき、その入学志願者の大学教育を受けるにふさわしい能力・意欲・適性等を多面的・総合的に判定するため、様々な取組みを実施。

文部科学省としても大学入試を実施する上でのガイドラインとして大学入学者選抜実施要項を毎年度、大学に通知し、入学者受入方針の明確化や選抜方法の多様化、評価尺度の多元化を推進。

○平成28年度大学入学者選抜実施要項(関連部分抜粋)

第1 基本方針

大学入学者選抜は、各大学(短期大学を含む。以下同じ。)が、それぞれの教育理念に基づき、生徒が高等学校段階までに身に付けた力を、大学において発展・向上させ、社会へ送り出すという大学教育の一貫したプロセスを前提として、各大学が、学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)や教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)を踏まえ定める入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)に基づき、大学への入口段階で入学者に求める力を多面的・総合的に評価することを役割とするものである。

このことを踏まえ、各大学は、入学者の選抜を行うに当たり、公正かつ妥当な方法によって、入学志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に判定する。(略)

主な入試方法は以下のとおり。

(1) 一般入試

調査書の内容、学力検査、面接・小論文等大学が適当と認める資料や方法により判定する方法。

(2) 推薦入試

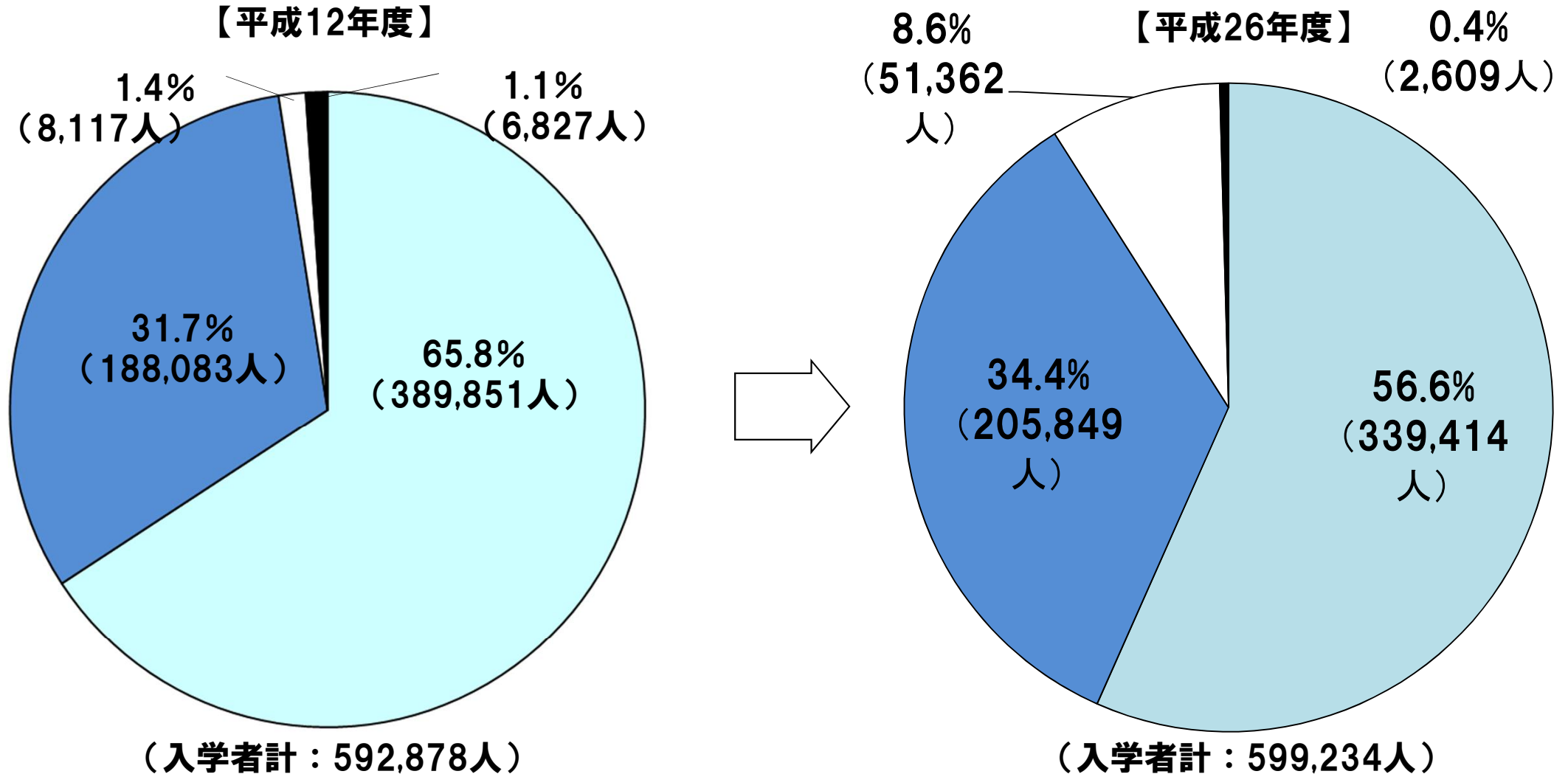
出身学校長の推薦に基づいて、原則として学力検査等を免除し、調査書を主な資料として、面接・小論文等を活用して判定する方法。

(3) アドミッション・オフィス入試(AO入試)

学力試験に偏ることなく、詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせ、受験生の能力・適性や学習に対する意欲・目的等を総合的に判定する方法。

平成26年度入学者選抜実施状況の概要（平成12年との比較）

平成12年度(AO入試調査開始年度)に比べて、AO入試、推薦入試を経由した入学者が大きく増加しており、入試方法の多様化が進んでいる。

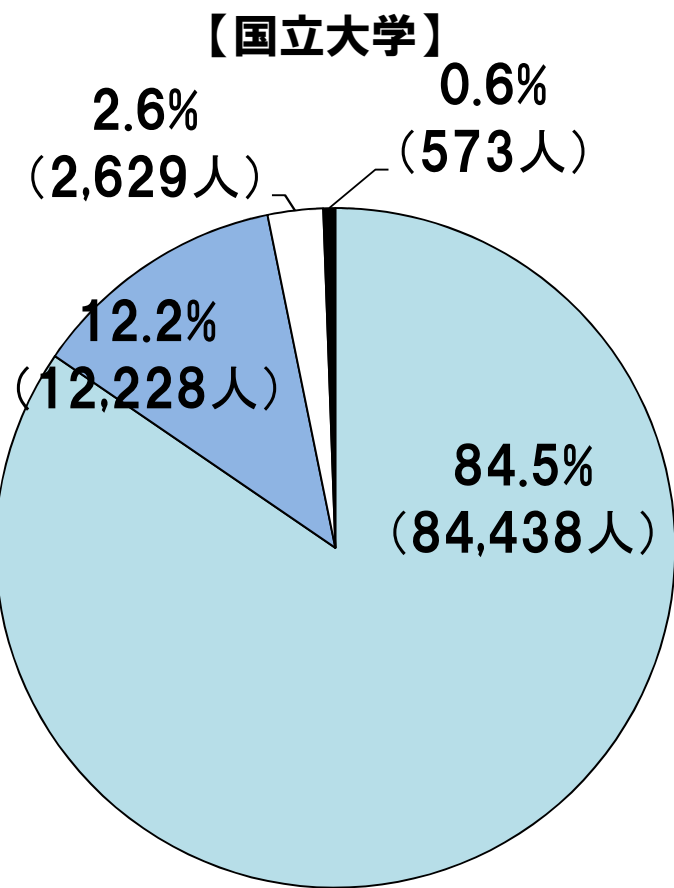


□一般入試 ■推薦入試 □アドミッション・オフィス入試 ■その他

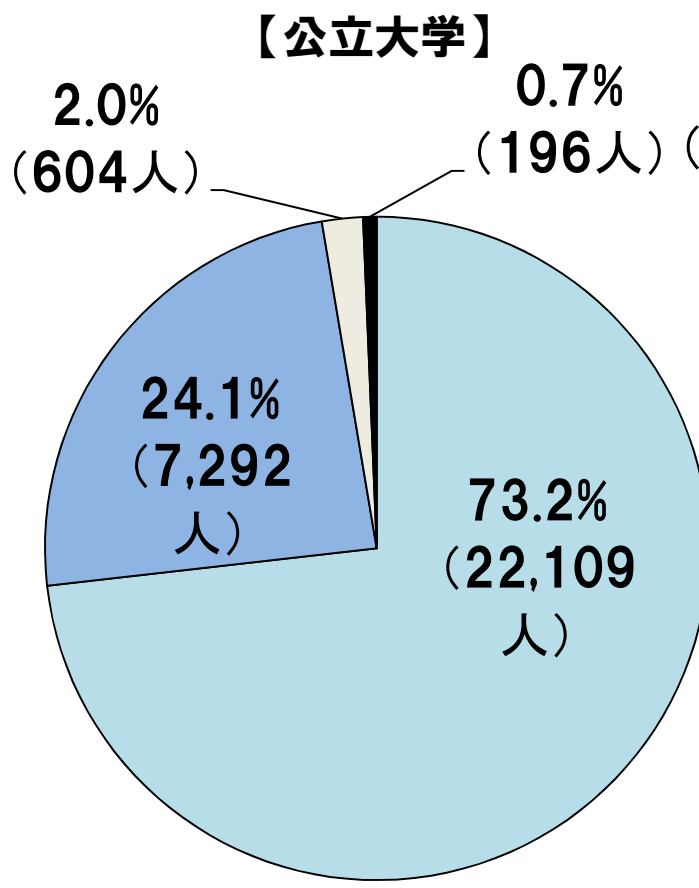
(注)「その他」: 専門高校・総合学科卒業生入試、社会人入試、帰国子女・中国引揚者等子女入試など

平成26年度入学者選抜実施状況の概要（国公立別）

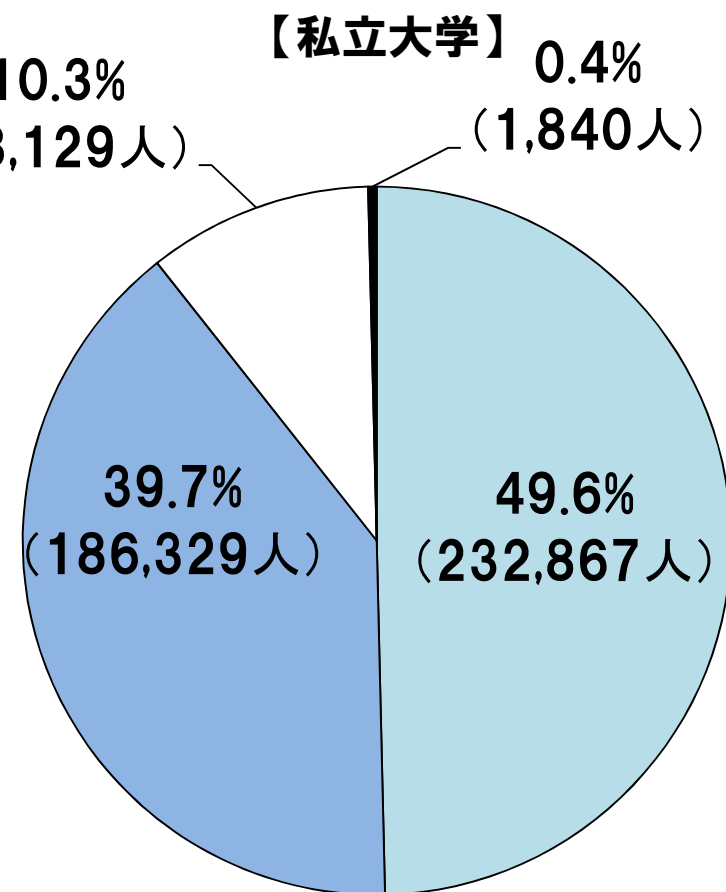
国公立大学では一般選抜が中心
 私立では約半数がAO入試、推薦入試を経由して入学している



（入学者計：99,868人）



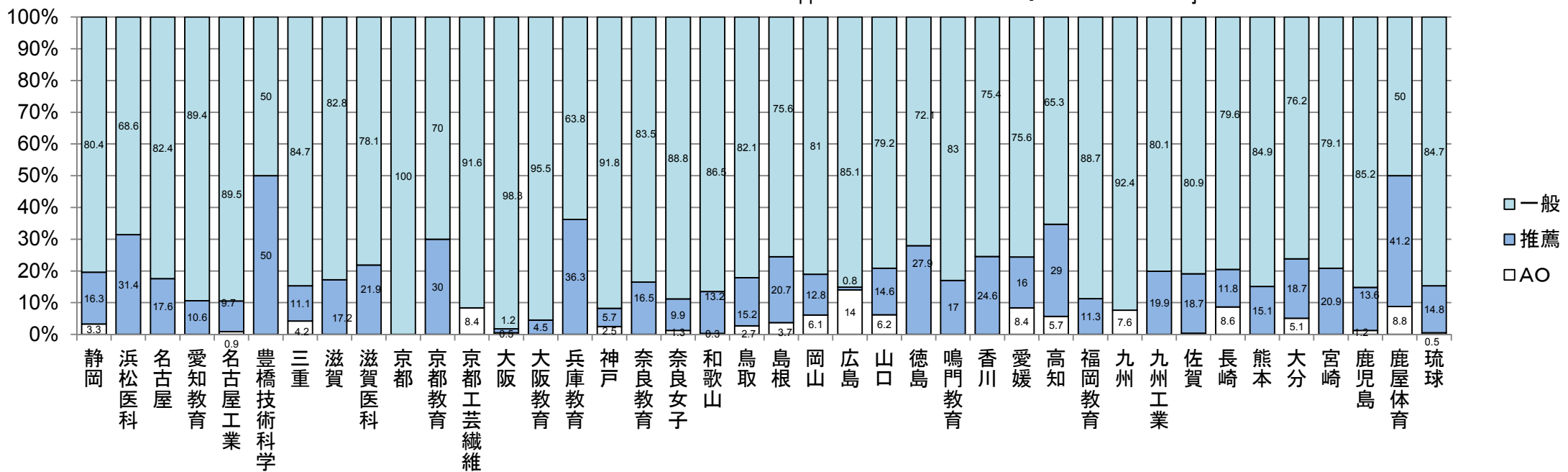
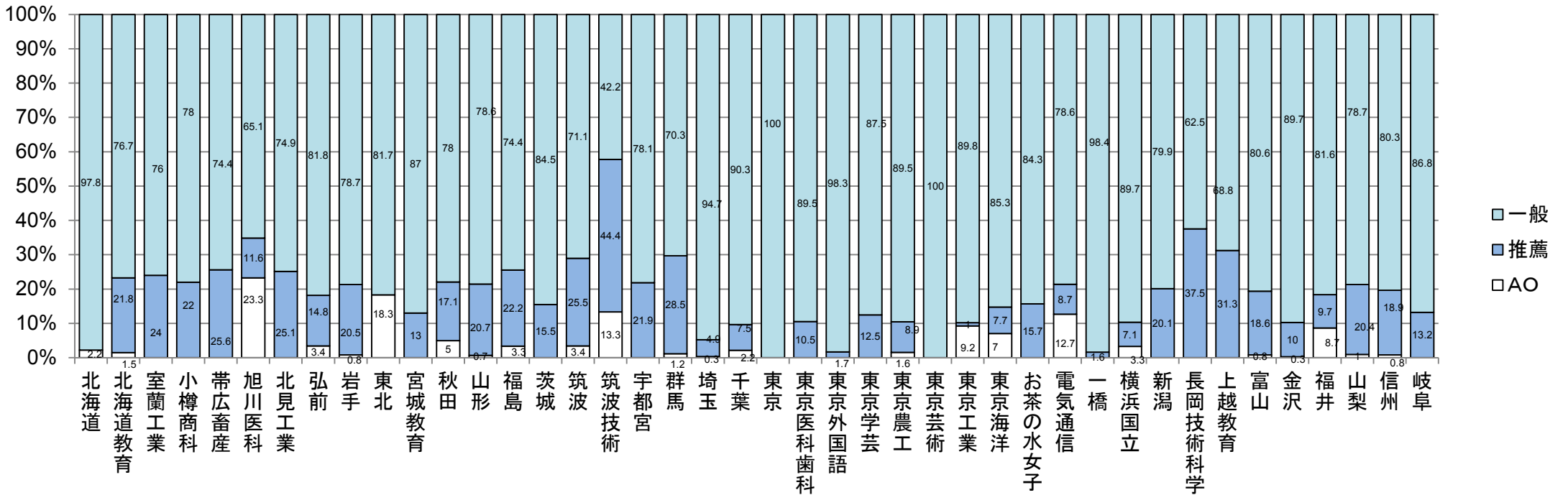
（入学者計：30,201人）



（入学者計：469,165人）

□ 一般入試 ■ 推薦入試 □ アドミッション・オフィス入試 ■ その他

国立大学における入試区分毎の募集人員の割合(平成27年度入試)



※東京大学、京都大学は、平成28年度入試より、推薦入試、AO入試を実施予定。

東京大学の推薦入試(平成28年度入試より導入予定)の例

[概要]

- ・ 全10学部で募集。募集人員は各学部で設定するが、全体として100名程度
- ・ 各学校からの推薦は男女各1名の合計2名まで(複数学部への推薦不可)
- ・ 各学部が定める推薦要件に該当し、平成28年度大学入試センター試験のうち、大学が定める教科・科目の全てを受験した者
- ・ 出願書類と面接等の審査結果及び大学入試センター試験の成績を総合的に評価して決定。
- ・ **大学入試センター試験**は、入学後の学修を円滑に行い得る基礎学力を有しているかどうかを判断する観点から、**8割以上**の得点であることを目安とする。

[各学部の例1:法学部(募集人員:10名程度)]

推薦要件: **高校の学業成績(各校の上位概ね5%以内)**や問題発見能力、課題設定能力を有すること、異なる文化的背景等を有する他者とのコミュニケーション能力に優れていることなどを要求

出願書類: **調査書**のほか、**推薦要件に合致することを証明する書類**(例えば、在学中に執筆した論文で志願者の問題発見能力・課題設定能力を証明するもの、表彰状や新聞記事等の社会に貢献する活動の内容を証明する資料、留学経験等の志願者が異なる文化的背景や価値観への理解を有することを示す資料、国際バカロレアやSATなど国際通用生のある入学資格試験における優秀な成績を証明する資料、TOEFLや英検、IELTSなどの外国語に関する語学力の証明書など)を要求

選抜方法: **提出書類**のほか、**グループディスカッション**や**個別面接**、**大学入試センター試験の結果**を総合的に評価

[各学部の例2:経済学部(募集人員:10名程度)]

推薦要件: 高等学校等でいずれかの分野における飛び抜けた才能を有すること、他者との対話性に優れ、経済分野に強い関心を有すること、高等学校等において英語、数学、地理歴史・公民のいずれかの2教科において成績が優秀であること。(地理歴史・公民はいずれかの1科目のみを対象)

提出書類: **調査書**のほか、**推薦要件に合致することを証明する書類**(例えば、数学オリンピックなどの科学オリンピックで顕著な成績をあげたことを示すもの、TOEFLや英検、IELTSなどの英語その他の外国語に関する語学力の試験において高得点を取ったことを示すもの、全国レベルの大会・コンクールでの入賞記録、留学を含む様々な国際的活動で、その内容が第三者によって高く評価されたものについて、その詳細や評価内容を記した文書など)を要求

選抜方法: **提出書類**のほか、**個別面接**(面接時に課題遂行能力を試すための課題を課す場合あり)、**大学入試センター試験の結果**を総合的に評価

京都大学の特色入試(平成28年度入試より導入予定)の例

[概要]

- ・ 全10学部で募集。募集人員は各学部で設定するが、全体として100名程度
- ・ 高等学校における幅広い学習に裏付けられた**総合力**と**学ぶ力**及び**高い志**を評価し、個々の学部が定めたカリキュラムと教育コースを受け取るにふさわしい**学力**と**意欲**を備えた者を選抜
- ・ 第一次選考で高大接続を重んじる観点から、志願者自らの学ぶ意欲や志について書類選考を通じて評価。
- ・ 第二次選考では、各学部において、学部が必要とする基礎学力や教育コースへの適合力を測定する能力測定考査ならびに論文試験、面接試験等を組み合わせて、望ましい人材の選抜を丁寧を実施。
- ・ 大学入試センター試験は、多くの場合、基礎学力を把握するために利用。

[各学部の例1:教育学部(募集人員:6名)]<学力型AO>

出願要件: **評定平均値4.3以上**で大学入試センター試験で指定した教科・科目を受験する者

出願書類: **調査書**、**学びの報告書**、**学びの設計書**

選抜方法: 第一次選考は、**調査書**、**学びの報告書**、**学びの設計書**により選考

第二次選考は、第一次選考に合格した者に対して、**課題**と**口頭試問**を行い、その成績と提出書類と総合して選考

課題では、読解力、論理的・批判的思考力、問題解決能力などについて評価

口頭試問では、探究心と洞察力、コミュニケーション能力などについて評価

第二次選考の配点は、課題50点、口頭試問50点の計100点

最終選考は、第二次選考合格者で、**大学入試センターの得点の合計が900点満点中80%以上の者**を合格者とする。

[各学部の例2:工学部電気電子工学科(募集人員:5名)]<推薦>

推薦要件: 人格・識見ともに特段に優れている者

特筆すべき能力、リーダーシップと高い基礎力を有する者

授業科目の一環として実施した課題研究や科学に関する課外活動において顕著な実績をあげた者

大学入試センター試験で指定した教科・科目を受験する者

の全てをみたとすこと

提出書類: **調査書**、**推薦書**、**学びの設計書**、**顕著な活動実績の概要**

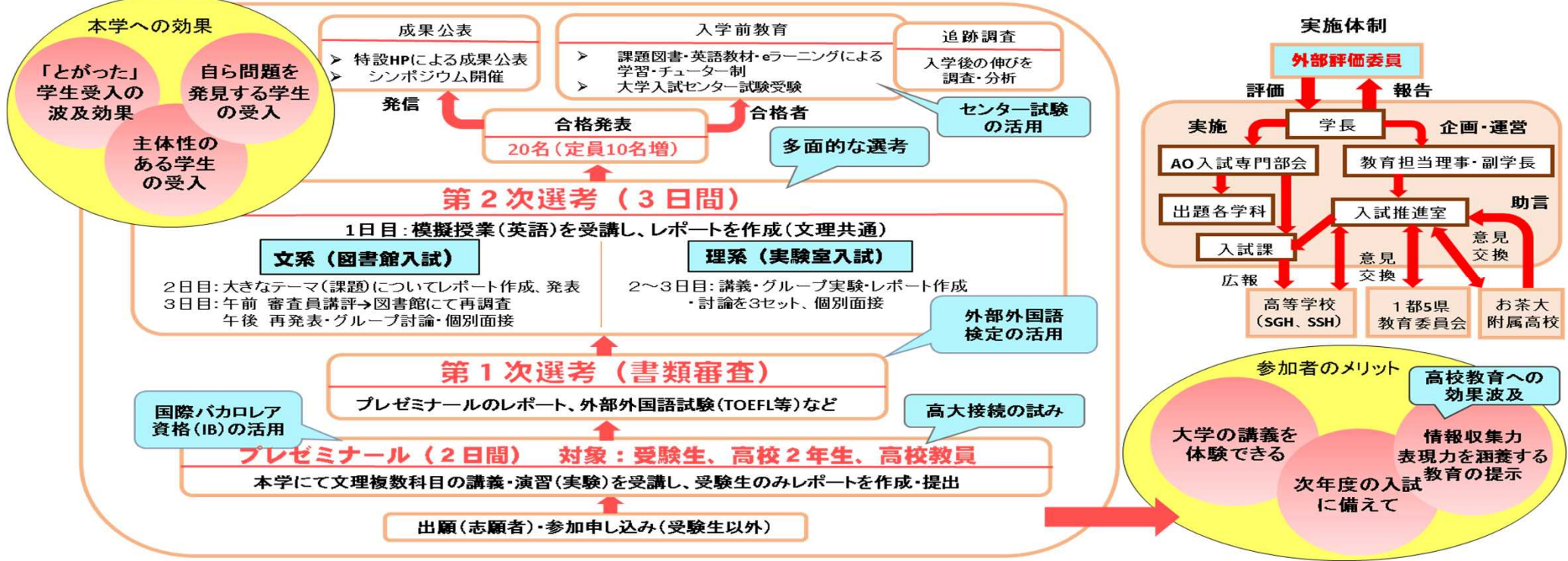
選抜方法: **提出書類**に重点を置き、A・B・C・Dの4段階で評価し、**A評価**の者のうち、**大学入試センター試験の合計得点が900点満点中80%を越えた者**を合格者とする。

大学等名：お茶の水女子大学
テーマ：テーマⅢ（入試改革）

取り組み概要

本学の取組は、特別入試、とくに現在のAO入試を抜本的に改革し、多面的・総合的に志願者の意欲、適性、能力、基礎学力を見極める入試を構築することを目的とする。募集定員を現在から倍増させ、全学で20人規模とし、丁寧で手間をかけた本学独自の「新フンボルト入試」を実施する。高大接続の要素をもつプレゼминаールおよび3日間にわたる本試験を通じて、基礎学力を担保しつつ受験生のもつ潜在力（ポテンシャル）を見極める。大学入学時に知的ピークを迎える学生ではなく、入学後の学修のなかで能力を大きく伸ばし、大学院に進学し社会に出てからリーダーとして飛躍しようとする「伸びしろ」のある学生を選抜する。

お茶大発 新型AO入試(新フンボルト入試)



【事業の成果】

	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
募集定員	10名(現行AO)	20名(新フンボルト入試)			
プレゼминаール参加 高校教員数	-	30名	40名	45名	50名
プレゼминаール 本入試	-	実施(2日間)	4日ないし5日間(新フンボルト入試)		
	2日間(現行AO)				

- ・多面的な能力評価を通じて「とがった」学生を受け入れることにより、学生の多様性が高まり、大学教育全体の活性化が期待される。
- ・プレゼминаールにより、高校教育への効果波及が見込まれる。
- ・本入試改革の成果を一般入試の一部に応用可能である。

大学等名：追手門学院大学
テーマ：テーマⅢ（入試改革）

大学で学ぶ意味を考え、学ぶ意欲と姿勢を持った受験生に入学を許可することを目的とし、受験前から「学ぶことについて考える」及び「アイデンティティの形成」の機会となるアサーティブプログラムとその成果を発揮できるアサーティブ入試を開発。

アサーティブとは

本学では、相手の意見に耳を傾けながら、自分の意見や考えを主張することができる態度、自分を知り表現することが大切になるという意味で使っています。

背景

大学全入時代

入試方法の多様化等により入学者の在り方も変容しており、学習意欲の低下や目的意識の希薄化などが顕著
(中央教育審議会 学士課程教育の構築に向けて 平成20年12月24日)

文教政策

大学入学者選抜は、本来、高等学校教育を基盤として、各大学のアドミッションポリシーの下、能力・意欲・適性を見極め、大学での教育に円滑につなげていくことを求める
(教育再生実行会議 第四次提言 平成25年10月31日)

事業による効果（期待する入学予定者像）

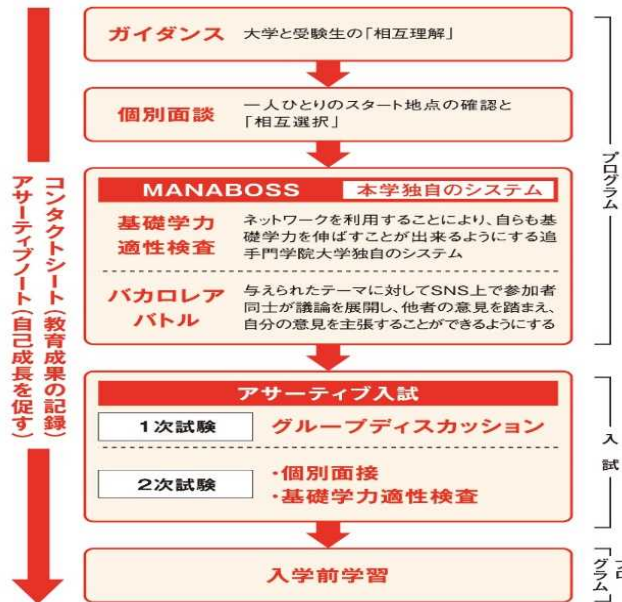
シラバスの活用ができる

講義への参加意欲の向上

各種活動への積極的な参加

などができる新入生の増加

アサーティブプログラム・アサーティブ入試の流れ



アサーティブプログラムの特徴

1 本学職員との「個別面談」

将来の自分を意識させ、大学で何を学ぶかを問い、大学で学ぶ意味を自ら気付くように促し、学ぶ意欲を引き出すことができるようにする。

2 独自開発システム「MANABOSS (マナボス)」

【MANABOSS導入の目的】

- ①基礎学力の確認と弱点の発見から計画的学習への動機づけができる。
- ②論理的思考や批判的思考を始めとして、物事を多様な観点から考察する能力を育成する。
- ③ポートフォリオで成長の記録を振り返ることができ、入学後の学生ポートフォリオにつなげることができる。



基礎学力適性検査

高等学校段階の学力を客観的に把握・活用ができるように「言語能力問題」と「非言語能力問題」を準備。「達成度」から自らの基礎学力の状態を把握し、計画的に学ぶ姿勢を養うことができる。

バカロレアバトル

大学において、「答えのない問題」を発見し、解決するために必要な専門的知識と汎用的能力を鍛えるための準備として、与えられた課題にたいしてじっくり考えることを養い、SNS上で議論を展開することができる。

3 自己成長を促す「アサーティブノート」

自らのことを理解し、大きな視野で周りの状況を見極め、自分で考えたことを、相手にしっかりと伝える準備ができるノートである。このことにより、アイデンティティの形成と自己成長を促すことになる。

【事業の成果】

	26年度	28年度 (目標値)	30年度 (目標値)
アサーティブガイダンス参加者数	300人	900人	1,250人
アサーティブ入試入学者の割合	3.9%	23.7%	32.9%
アサーティブ面談担当職員の割合	26%	61%	82%

・主体的に学ぶ姿勢とアサーティブな態度を身に付けた入学者が増えることにより、本学の教育目標である「生きる力」「学ぶ力」「考える力」を備えた人材養成(「追大学生力」)を実現できる道になる。

・職員が関わることにより、学生実態を的確に把握し、教育改革への具体的な政策提起ができる力量と、個々の学生に対する教育支援ができる力を育成することで、教職協働による教育が実現可能となる。

アドミッション・ポリシーの作成状況(平成24年度入試)

○入学者受入方針の策定の状況

区分		入学者受入方針を定めている大学数		
		学部ごとの入学者受入方針を定めている大学・学部数		学部数
		大学数	学部数	
大学	国立	82 (100.0)	81 (98.8)	375 (98.4)
	公立	80 (100.0)	80 (100.0)	173 (100.0)
	私立	579 (100.0)	577 (99.7)	1,618 (99.0)
	計	741 (100.0)	738 (99.6)	2,166 (99.0)

○入学者受入方針の明確化の状況

区分		求める学生像だけでなく、高等学校段階で習得しておくべき内容・水準を具体的に定めている大学数
大学	国立	58 (70.7)
	公立	27 (33.8)
	私立	231 (39.9)
	計	316 (42.6)

文部科学省大学入試室調べ

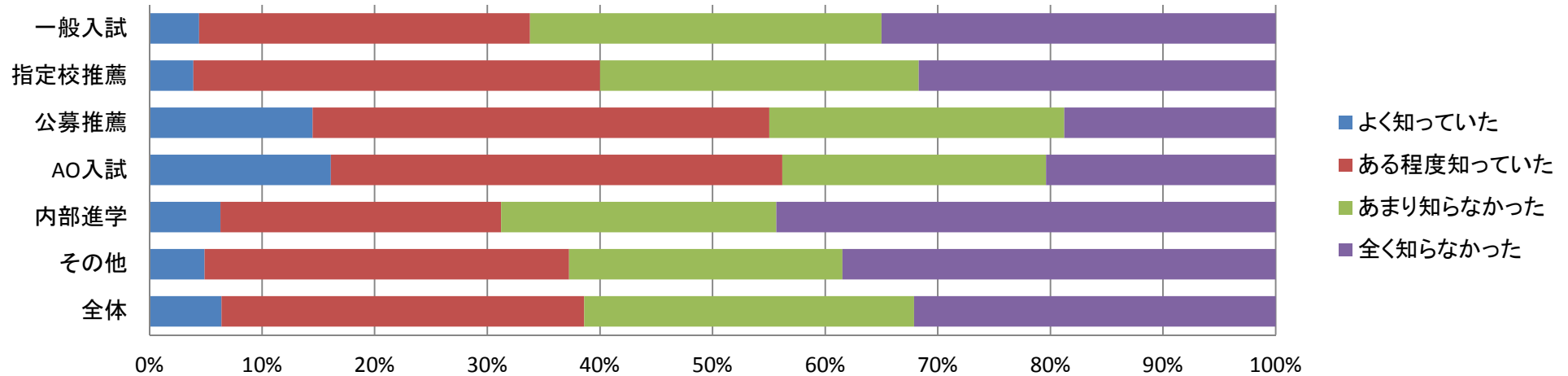
○学校教育法施行規則第七十二条の二(平成22年6月改正、平成23年4月施行)

大学は、次に掲げる教育研究活動等の状況についての情報を公表するものとする。

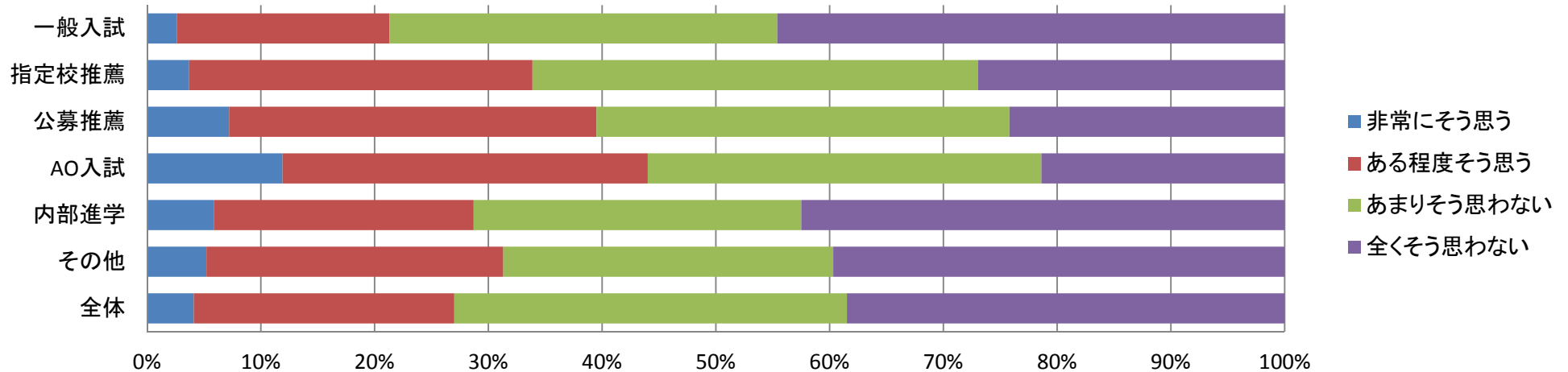
- 一 大学の教育研究上の目的に関する事
 - 二 教育研究上の基本組織に関する事
 - 三 教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関する事
 - 四 入学者に関する受入方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関する事
 - 五 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関する事
 - 六 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たつての基準に関する事
 - 七 校地、校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関する事
 - 八 授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関する事
 - 九 大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関する事
- 2 大学は、前項各号に掲げる事項のほか、教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報を積極的に公表するよう努めるものとする。
 - 3 第一項の規定による情報の公表は、適切な体制を整えた上で、刊行物への掲載、インターネットの利用その他広く周知を図ることができる方法によつて行うものとする。

アドミッション・ポリシーに対する学生の受け止め

入学者のアドミッションポリシーの認知度



アドミッション・ポリシーを重視して大学を選んだか



出典：アドミッション・ポリシーに関する調査報告書「アドミッション・ポリシーの効果に関する研究」平成26年3月
大学入試センター研究開発部

アドミッション・ポリシーに基づいて大学が求める能力を明示している例(東京大学)

高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと(数学の例※)

東京大学を志望する皆さんには、アドミッション・ポリシーにも明示されているように、本学に入学するまでに、できるだけ多くのことを、できるだけ深く学んでほしいと思います。以下、本学を受験しようと考えている皆さんに向けて、高等学校段階までの学習において、特に留意してほしいことを教科別に掲げます。

※数学のほか、国語、地理歴史・公民、理科、外国語について掲げられている。

数 学

数学は、自然科学の基底的一分野として、人間文化の様々な領域で活用される学問であり、科学技術の発展に貢献するだけでなく、社会現象を客観的に表現し予測するための手段ともなっています。そのため、東京大学の学部前期課程(1, 2年生)では、理科各類の全学生が解析・代数を必修科目として履修し、文科各類の学生も高度な数学の授業科目を履修できるカリキュラムが用意されています。

本学に入学しようとする皆さんは、入学前に、高等学校学習指導要領に基づく基本的な数学の知識と技法を習得しておくことはもちろんのことですが、将来、数学を十分に活用できる能力を身につけるために、次に述べるような総合的な数学力を養うための学習を心掛けてください。

1) 数学的に思考する力

様々な問題を数学で扱うには、問題の本質を数学的な考え方で把握・整理し、それらを数学の概念を用いて定式化する力が必要となります。このような「数学的に問題を捉える能力」は、単に定理・公式について多くの知識を持っていることや、それを用いて問題を解く技法に習熟していることとは違います。そこで求められている力は、目の前の問題から見かけ上の枝葉を取り払って数理としての本質を抽出する力、すなわち数学的な読解力です。本学の入学試験においては、高等学校学習指導要領の範囲を超えた数学の知識や技術が要求されることはありません。そのような知識・技術よりも、「数学的に考える」ことに重点が置かれています。

2) 数学的に表現する力

数学的に問題を解くことは、単に数式を用い、計算をして解答にたどり着くことではありません。どのような考え方に沿って問題を解決したかを、数学的に正しい表現を用いて論理的に説明することです。入学試験においても、自分の考えた道筋を他者が明確に理解できるように「数学的に表現する力」が重要視されます。普段の学習では、解答を導くだけでなく、解答に至る道筋を論理的かつ簡潔に表現する訓練を十分に積んでください。

3) 総合的な数学力

数学を用いて様々な課題を解決するためには、数学を「言葉」や「道具」として自在に活用できる能力が要求されますが、同時に、幅広い分野の知識・技術を統合して「総合的に問題を捉える力」が不可欠です。入学試験では、数学的な思考力・表現力・総合力がバランスよく身につけているかどうかを判断します。

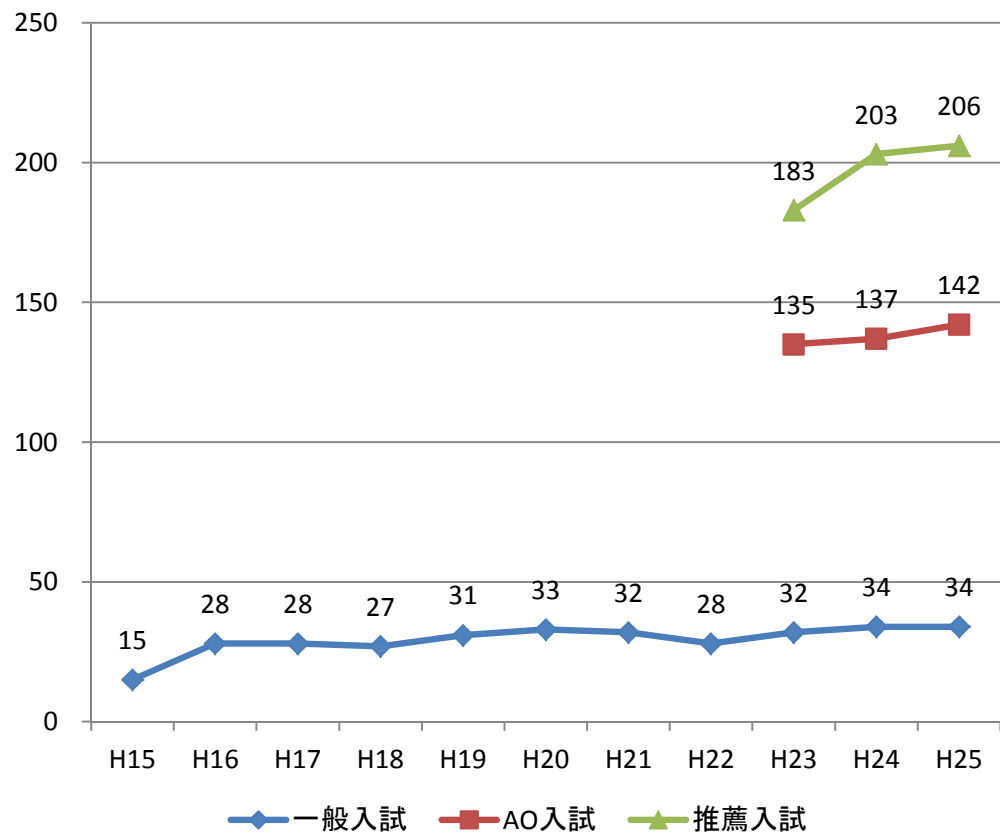
一般入試において面接、小論文等を課す国公立大学(平成27年度入試)

区 分	平 成 2 7 年 度					
	国 立		公 立		計	
入 学 者 選 抜 の 実 施 大 学 ・ 学 部 数 《 募 集 人 員 》	大学	学部	大学	学部	大学	学部
	82	385	84	178	166	563
	《 96,136 》		《 28,889 》		《 125,025 》	
小 論 文	64	178	59	89	123	267
	(78.0)	(46.2)	(70.2)	(50.0)	(74.1)	(47.4)
総 合 問 題	21	43	16	19	37	62
	(25.6)	(11.2)	(19.0)	(10.7)	(22.3)	(11.0)
面 接	64	160	57	85	121	245
	(78.0)	(41.6)	(67.9)	(47.8)	(72.9)	(43.5)
実 技 検 査	53	56	17	22	70	78
	(64.6)	(14.5)	(20.2)	(12.4)	(42.2)	(13.9)
リ ス ニ ン グ	11	20	3	4	14	24
	(13.4)	(5.2)	(3.6)	(2.2)	(8.4)	(4.3)

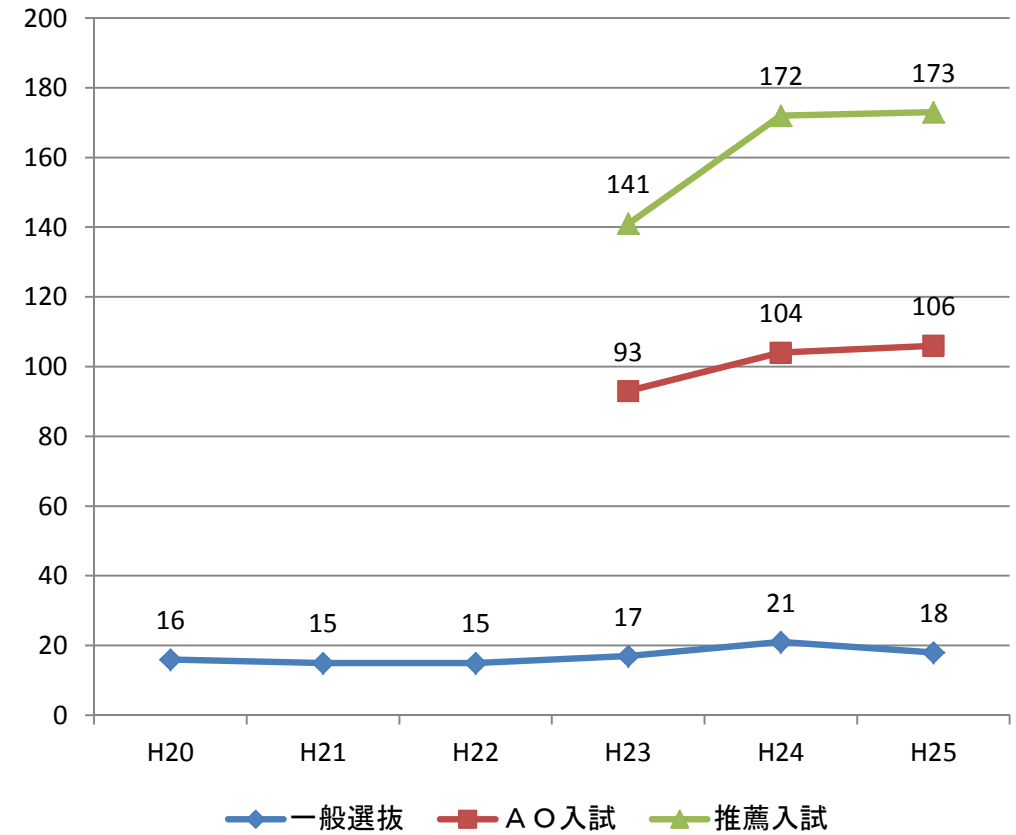
- (注)
1. 本表は、平成26年度7月末現在で集計したものである。(設置認可申請中等の予定のものを含む。)
 2. 学部内の募集単位により選抜方法が異なる場合には、それぞれの箇所計上している。
 3. () 書きは、入学者選抜実施大学・学部数に対する割合を示す。
 4. 別日程とは、一般入試においては分離分割方式によらないで試験を実施するものを示す。以下の資料についても同様。
 5. 募集人員に外国人留学生を対象とする選抜分は含まない。

大学入学者選抜における資格・検定試験等の活用状況(推移)

<語学関連>
(大学数)



<語学以外>
(大学数)



文部科学省大学入試室調べ

1. 語学関係(英語)

実用英語技能検定、TOEFL、TOEIC、IELTS、国際連合公用語英語検定、ケンブリッジ大学一般英語検定、GTEC、日商ビジネス英語検定、全商英語検定、工業英語能力検定、全工・リスニング英語検定 等

2. 語学関係(英語以外)

実用フランス語技能検定試験、フランス国民教育省認定フランス語資格試験(DELTA、DALF)、ドイツ語技能検定試験、スペイン語技能検定、スペイン語検定試験(DELE)、ロシア語能力検定試験、実用中国語技能検定試験、中国語コミュニケーション能力検定、中国語検定試験、漢語水平考試(HSK)、ハングル能力検定試験、韓国語能力試験 等

3. その他

全商各種検定(情報処理、商業経済等)、実用数学技能検定、経産省ITパスポート試験、秘書技能検定、全工各種検定(情報技術、パソコン利用技術等、ジュニアマイスター顕彰)、日商各種検定(販売士、PC、珠算等)、全経簿記能力検定試験、語彙・読解力検定、マイクロソフトオフィススペシャリスト、パソコン検定、情報処理検定、珠算能力検定、全珠連珠算検定、歴史能力検定、世界遺産検定、ヤマハ音楽能力検定、食物調理技術検定、調理師免許 等

(参考) 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠について

- CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment) は、語学シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、分かりやすい、包括的な基盤を提供するものとして、20年以上にわたる研究を経て策定された。欧州域内外で使われている。
- 欧州域内では、国により、CEFRの「共通参照レベル」が、初等教育、中等教育を通じた目標として適用されたり、欧州域内の言語能力に関する調査を実施するにあたって用いられたりするなどしている。

熟練した 言語使用者	C2	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる。
自立した 言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の 言語使用者	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

(出典) ブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッジ大学英語検定機構

各試験団体のデータによるCEFRとの対照表

CEFR	Cambridge English	英検	GTEC CBT	IELTS	TEAP	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC / TOEIC S&W
C2	CPE (200+)			8.5-9.0				
C1	CAE (180-199)	1級 (2810-3400)	1400	7.0-8.0	400	95-120		1305-1390 L&R 945~ S&W 360~
B2	FCE (160-179)	準1級 (2596-3200)	1250-1399	5.5-6.5	334-399	72-94	341-352	1095-1300 L&R 785~ S&W 310~
B1	PET (140-159)	2級 (1780-2250)	1000-1249	4.0-5.0	226-333	42-71	322-340	790-1090 L&R 550~ S&W 240~
A2	KET (120-139)	準2級 (1635-2100)	700-999	3.0	186-225		300-321	385-785 L&R 225~ S&W 160~
A1		3級-5級 (790-1875)	-699	2.0				200-380 L&R 120~ S&W 80~

英検：日本英語検定協会 <http://www.eiken.or.jp/forteachers/data/cefr/>
http://www.eiken.or.jp/association/info/2014/pdf/0901/20140901_pressrelease_01.pdf

TOEFL：米国ETS Webサイトに近日公開予定

IELTS：ブリティッシュ・カウンシル（および日本英語検定協会）資料より

TEAP：第1回 英語力の評価及び入試における外部試験活用に関する検討会 吉田研作教授資料より

Cambridge English（ケンブリッジ英検）：ケンブリッジ大学英語検定機構 <http://www.cambridgeenglish.org/exams-and-qualifications/cefr/cefr-exams/>
<http://www.cambridgeenglish.org/exams/cambridge-english-scale/>

※各試験団体の公表資料より文部科学省において作成

GTEC：ベネッセコーポレーションによる資料より

TOEIC：IIBC <http://www.toEIC.or.jp/toEIC/about/result.html>
「L&R」または「S&W」の記載が無い数値が4技能の合計点

主な英語の資格・検定試験の概要

試験名	実施団体	受験人数	年間実施回数	成績表示方法	出題形式: 実施方式 (*1)	受験料
Cambridge English (ケンブリッジ英検)	ケンブリッジ大学 英語検定機構	国内人数非公開 ※全世界では約250万人	2-3回	上初級~特上級(5つ) 可否、スコア(80-230)、グレード	L, R, W: 紙 S: ペア面接	PET(B1) 11,880円~ KET(A2) 9,720円~ (*5)
実用英語技能検定	日本英語検定協会	約235.5万人 (H25実績)	3回	1級~5級 可否による表示 H27よりスコア併記予定	L, R: 紙/CBT (W): 紙 (S): 面接/CBT (*2)	2級: 5,000円 準2級: 4,500円
GTEC CBT	ベネッセコーポレーション Berlitz Corporation ELS Educational Services ※一般財団法人進学基準研究機構(CEES)と共催	非公表	3回 (H27)	0-1400点	L, S, R, W: CBT	9,720円
GTEC for STUDENTS	ベネッセコーポレーション Berlitz Corporation ELS Educational Services	約73万人 (H26実績)	2回	0-810点	L, R, W: 紙 (S): タブレット(*3)	3,080円 L, R, W (5,040円 L, R, W, S)
IELTS	ブリティッシュ・カウンシル、 ケンブリッジ大学英語検定機構 日本英語検定協会 等	約3万人 (H26実績) ※全世界では240万人	約35回	1.0-9.0 (0.5刻み)	L, R, W: 紙 S: 面接	25,380円
TEAP	日本英語検定協会	約1万人 (H26実績)	3回	80-400点	L, R, W: 紙 S: 面接 (*4)	15,000円
TOEFL iBT	テスト作成: ETS 日本事務局: CIEE	非公表	40-45回	0-120点 (4技能を各0-30点で評価)	L, S, R, W: CBT	230USドル
TOEFL Junior Comprehensive	テスト作成: ETS 日本事務局: GC&T	非公表	2-3回	0-352点	L, S, R, W: CBT	9,500円
TOEIC	テスト作成: ETS 日本事務局: IIBC	約236.1万人 (H25実績) ※TOEICプログラム全世界700万人	10回	10-990点 (L, R各5-495点)	L, R: 紙	5,725円
TOEIC S&W	テスト作成: ETS 日本事務局: IIBC	約1.5万人 (H25 実績) ※TOEICプログラム全世界700万人	24回	0-400点 (S, W各0-200点)	S, W: CBT	10,260円

*1: L=Listening, S=Speaking, R=Reading, W=Writing

*2: Wは1級・準1級、Sは3級以上

*3: Sはオプション

*4: L/R, L/R/Wでも受験可能

*5: 実施試験センターにより異なることあり

主な英語の資格・検定試験の出題意図・語彙数 等

試験名	目的・出題意図	語彙数	国際通用性 ①実施国数 ②主な活用地域 ③海外団体との連携
Cambridge English (PET:CEFR B1)	英語圏における日常生活に必要なとされる実践的な英語力があるかを評価する	3,000語程度 (*1)	①約130カ国 ②英国、欧州、オーストラリア、ニュージーランド ③CaMLA(米国ミシガン大学)、OET(豪州)等
実用英語技能検定 (2級: CEFR B1)	英語圏における社会生活(日常・アカデミック・ビジネス)に必要な英語を理解し、使うことができるかを評価する	4,000語程度 (*2)	①約50カ国 ②アメリカ、オーストラリア、カナダ等 ③アジア6地域7団体およびCRELLA(英国)
GTEC CBT	英語を使用する大学で機能できる(アカデミックな)英語コミュニケーション力を測る	3,000～6,000語程度 (CEFR C1まで)	②北米(ELS Educational Services)
GTEC for STUDENTS	英語によるジェネラルな状況におけるコミュニケーション能力を測る	3,000語以下 ※タイプによって異なる (CEFR B2まで)	
IELTS	英語を用いたコミュニケーションが必要な場所において、就学・就業するために必要な英語力があるかを評価する	5,000～6,000語程度(*2)	①約140ヶ国以上 ②EU諸国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、アメリカ等
TEAP	EFL環境の大学で行われる授業等で行う言語活動において英語を理解したり、考えを伝えたりすることができるかを評価する	2,000～5,000語程度 (タスクにより異なる) (*2)	③CRELLA(英国)
TOEFL iBT	高等教育機関において英語を用いて学業を修めるのに必要な英語力を有しているかを測ることを目的とする。	(R) 3,000語で90.45%をカバー 5,000語で95.37%をカバー (L) 3,000語で96.22%をカバー(*3)	①約130か国以上 ②英語圏(北米、オーストラリア、ニュージーランド等)、非英語圏(ドイツ、オランダ、トルコ、韓国等)
TOEFL Junior Comprehensive	英語を母国語としない中高生の英語運用能力を世界標準で評価する。	3,000語程度 98%の単語がセンター試験に出現(*4)	①8か国(実施国数拡大中、2技能については既に50か国以上)
TOEIC / TOEIC S&W	和文・英文和訳などの技術ではなく、身近な内容からビジネスまで幅広くどれだけ英語でコミュニケーションができるかということの評価する。	4,000語以上 (*5)	①約150か国

*1: English Vocabulary Profile Wordsに基づいてカウントした概算 *2: BNC(British National Corpus) *3: BNC/COCA word-family lists < 第1回連絡協議会資料より > *4: 2006年以降のセンター試験。グローバル・コミュニケーション&テストニング独自調査(2014年)

*5: 外部リサーチャーが独自に行った調査結果「英検2級より多いがテレビ、ニュース番組よりは少ない」からの推計値

英語 4 技能資格・検定試験の活用事例

◇生徒・学生の英語力向上における活用例

<高校の例>

➤ ○○高等学校
コミュニケーション活動を重視した授業において、英検の過去問題を活用。生徒の意欲を引き出す。受験前には、英語科教員とALTで面接指導も実施。

➤ ○○高等学校
スピーチコンテストや短期留学等の取組を進める中で、英語力向上の目標として資格・検定試験を活用

<大学の例>

➤ スーパーグローバル大学等事業 採択大学
入学時から卒業時における目標を設定し、定期的にTOEFL等の試験を受け、卒業時には、実践的なコミュニケーションが可能なグローバル人材を育成

➤ ○○大学
大学で学習する際に必要とされる英語運用能力を正確に測定するテストを導入し、基準点を設け、入学者選抜の際にすると共に、入学後の習熟度別クラス編成にも活用することで、英語力向上のためのきめ細かな指導を実施

◇入試における換算方法等（例：出願要件、みなし満点、点数加算等）の例

<いわゆる「みなし満点」>

➤ ○○大学（一般入試）
TOEFL iBT71点以上
TOEFL PBT530点以上
英検準1級
IELTS 4技能6.5以上のスコアまたは等級を所持している者については、大学入試センター試験の英語科目を満点とし換算して、合否判定を行う

<点数加算の例>

➤ ○○大学	➤ ○○大学
TOEFL 48点以上 5点	英検 2級以上 10点
61点以上 10点	英検準 2級 8点
79点以上 25点	英検 3級 6点
100点以上 50点	

➤ ○○高等学校
推薦入試において英検 3級以上で加点

<出願要件の一部、英語試験免除>

➤ ○○大学
【自己推薦入試等：免除】
TOEFL68点以上（経済、商学関係）
【英語運用能力特別試験：出願要件】
TOEFL 68点以上
（法学・政治学、国際関係）

➤ ○○大学（一般入試）
英検 2級以上：英語学力試験を免除

<高校入試の例>

➤ 大阪府における取組
入学者選抜においてTOEFL iBT、IELTS、英検のスコア等を一定の得点に換算し、学力検査の英語の得点と比較して高い方の得点を学力検査の得点とする（平成29年度より開始）

国際バカロレアの活用例（平成27年度入試）

1. 玉川大学「国際バカロレアAO型入学審査」

【実施学部(募集人員)】全学部(若干名)

【出願要件】

玉川大学を第一志望(専願)とし、国際バカロレア資格を2014年4月から2015年3月31日までに取得または取得見込みの者(ただし、2015年3月31日までに18歳に達していること)。なおかつ、日本語を母語とする者またはJapaneseBをHLで履修し、成績評価が4以上の者。

【出願に必要な書類】

- ①コミュニケーションシート 受験者の意思を確認する独自の対話形式により構成
- ② EVALUATION FORM カレッジカウンセラーまたはDPコーディネーターが作成。人物的特徴の判断に使用。
- ③ 国際バカロレア資格証書のコピー ④ IB最終試験成績証明書 ⑤高等学校調査書[もしくは成績証明書と卒業(卒業見込)証明書]
- ⑥ 各種資格・検定取得の証明書の写し(指定する検定等に該当する者のみ)

【選抜方法】書類審査

2. 岡山大学「国際バカロレア入試(AO入試)」(4月入学)

【実施学部(募集人員)】文学部、教育学部、法学部、経済学部、理学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部、環境理工学部、農学部、およびマッチングプログラムコース(医学部医学科(3人)を除く、各学部若干人)

【出願要件】

- (1)国際バカロレア資格証書(IBフルディプロマ)を平成25年4月から平成27年3月までに授与される者で、平成27年3月31日までに18歳に達するもの
- (2)国際バカロレア資格の取得において、次の①および②に該当する者
 - ①言語Aを日本語により履修し、成績評価が4以上の者
 - ②岡山大学が指定する科目(1~2科目)を指定のレベルにより履修し、必要な成績評価を修めた者又は成績評価が4以上の者
- (3)岡山大学での勉学を強く希望し、最終の選抜に合格した場合には必ず入学することを確約できる者

【出願に必要な書類】

<IB試験を受験した者>

- ①国際バカロレア資格証書の写し ②IB最終試験6科目の成績評価証明書(本紙) ③自己推薦書 様式有り。
- ④評価書 学校長、進路指導担当者又は日本語の担当教員が作成。様式有り。

<IB試験受験予定者>

- ①国際バカロレア資格の取得見込み証明書(様式任意) ②IBディプロマPredicted Grades若しくはAnticipated Grades ③自己推薦書 様式有り。
- ④評価書 学校長、進路指導担当者又は日本語の担当教員が作成。様式有り。

【選抜方法】

学部等により、①書類審査のみで行う ②面接(教育学部・医学部・歯学部)の結果および書類審査を総合して行う

多面的・総合的な選抜を行っている例(平成27年度入試)

1. 東北大学工学部:AO入試Ⅱ期(募集人員:104名)

- ・出願要件として調査書の学習成績概評がA段階に属すること又は、高等学校の教科の評定平均値(理数系教科4.5且つ全体4.0以上)を要求
- ・出願書類(210点)、小論文試験(240点)、面接試験(150点)を総合的、多面的に評価(計600点満点)
- ・志願者数が募集人員を大幅に上回る場合は、出願書類による第1次選抜を実施
- ・出願書類として活動報告書(主要な活動の経歴、成果等を志願者が作成、記載事項確認者が確認)、志願者評価書(出身(在学)学校長が作成)、志望理由書の提出を要求

2. 慶應義塾大学総合政策学部・環境情報学部:自由応募入試 A方式(募集人員:各学部100名(他の方式と合算))

- ・出願書類をもとに第1次選抜を実施
- ・出願書類として志願者評価(志願者を客観的に知る立場にある者2名が作成)、活動報告(中学卒業後から出願に至るまでの学業・学業外の活動内容について志願者が作成。出願要件の判断に使用。)、志望理由・入学後の学習計画・自己アピール(志望理由とともに文章と自由記述を用いて自由に表現)、任意資料(所定の資料だけでは表現しきれないもので、選考にあたり有用と判断した資料)を要求
- ・第2次選抜で面接試験(30分)を実施

3. 九州大学21世紀プログラム:AO入試(募集人員:26名)

- ・出願書類をもとに第1次選抜を実施
- ・出願書類として調査書、志望理由書、活動歴報告書(中学時代から出願時までに取り組んだ学校での勉学以外の各種活動等について記述したものを志願者が作成)を要求
- ・第2次選抜で講義(3講義、各約50分)に関するレポート(各約70分)と討論(150分)、小論文(約270分)及び面接(約15分)を課し、提出書類の内容と合わせて総合判定

大学入試センター試験の概要

【目的】

大学入学志願者の高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的として、大学が共同して実施。

【平成27年度大学入試センター試験】

1. 試験期日

- ・本 試 験：平成27年1月17日(土)
18日(日)
- ・追(再)試験：平成27年1月24日(土)
25日(日)

※試験は1/13日以降の最初の土日に実施

2. 志願者数、利用大学数等

- ・志願者数：559, 132人
[対前年度▲1, 540人]
 - ・試験場数：690試験場
[対前年度▲3試験場]
 - ・利用大学数：689大学
[対前年度+4大学]
- 160短期大学
[対前年度+2短期大学]
- (国公私別)
- | | | |
|----|---------|--------|
| 国立 | 82大学 | [100%] |
| 公立 | 84大学 | [100%] |
| 私立 | 523大学 | [90%] |
| 公立 | 16短期大学 | [94%] |
| 私立 | 144短期大学 | [45%] |

【平成27年度試験時間割】

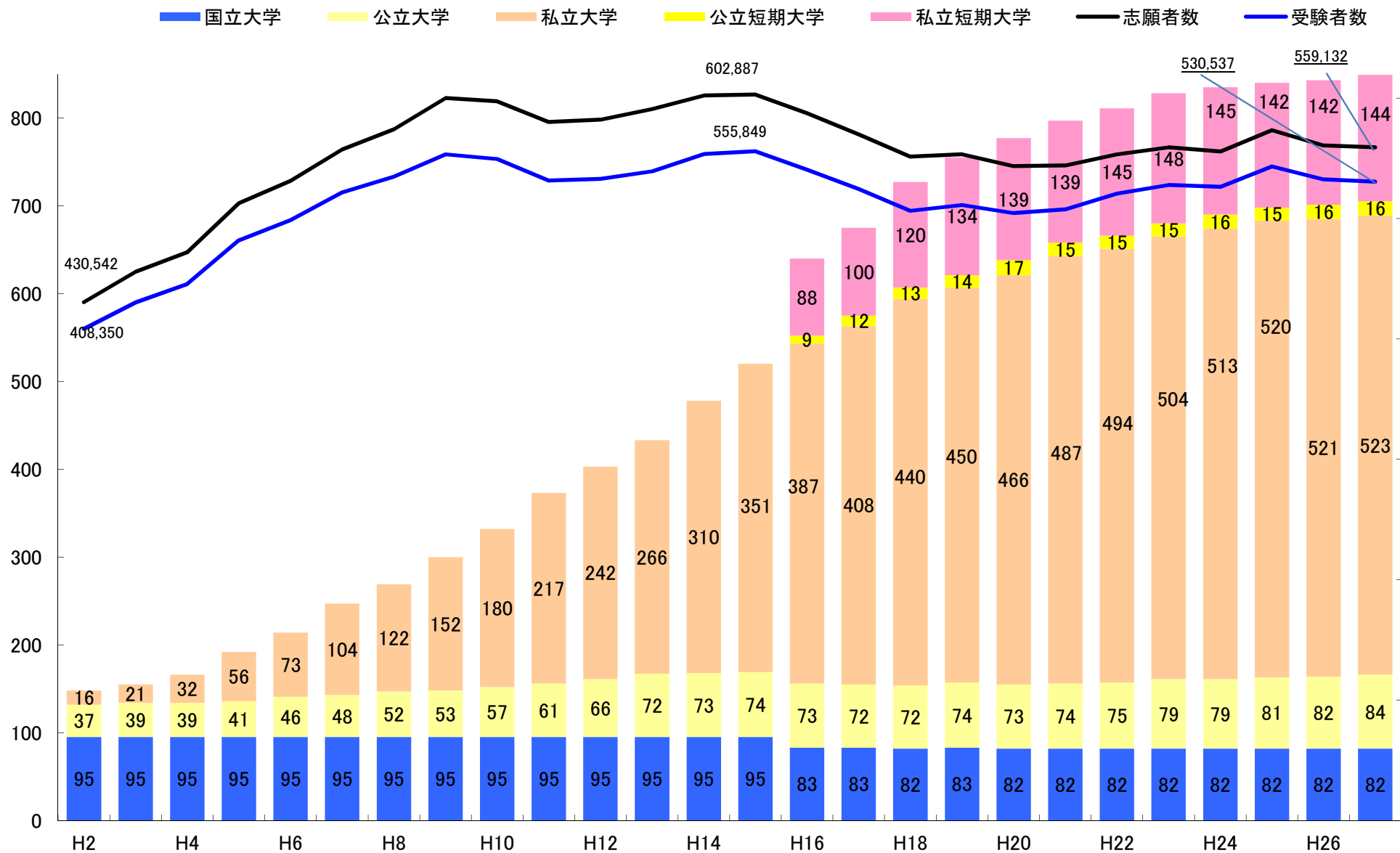
※出題教科科目数 6教科31科目(第1回(平成2年) 5教科18科目)

期 日	出 題 教 科 ・ 科 目		試 験 時 間
平成27年 1月17日(土)	地理歴史 公 民	「世界史A」「世界史B」 「日本史A」「日本史B」 「地理A」「地理B」 「現代社会」「倫理」 「政治・経済」「倫理, 政治・経済」	2科目受験 9:30～11:40 1科目受験 10:40～11:40
		国 語	「国語」 13:00～14:20
	外国語	「英語」「ドイツ語」「フランス語」 「中国語」「韓国語」	【筆記】 15:10～16:30 ----- 【リスニング】 「英語」のみ 17:10～18:10
1月18日(日)	理 科 ①	「物理基礎」「化学基礎」 「生物基礎」「地学基礎」	9:30～10:30
	数 学 ①	「数学I」「数学I・数学A」 「旧数学I」「旧数学I・旧数学A」	11:20～12:20
	数 学 ②	「数学II」「数学II・数学B」 「工業数理基礎」「簿記・会計」 「情報関係基礎」 「旧数学II・旧数学B」	13:40～14:40
	理 科 ②	「物理」「化学」 「生物」「地学」 「理科総合A」「理科総合B」 「物理I」「化学I」 「生物I」「地学I」	2科目受験 15:30～17:40 1科目受験 16:40～17:40

※参加大学数の割合の母数は、平成26年度入学者選抜を実施した大学数。

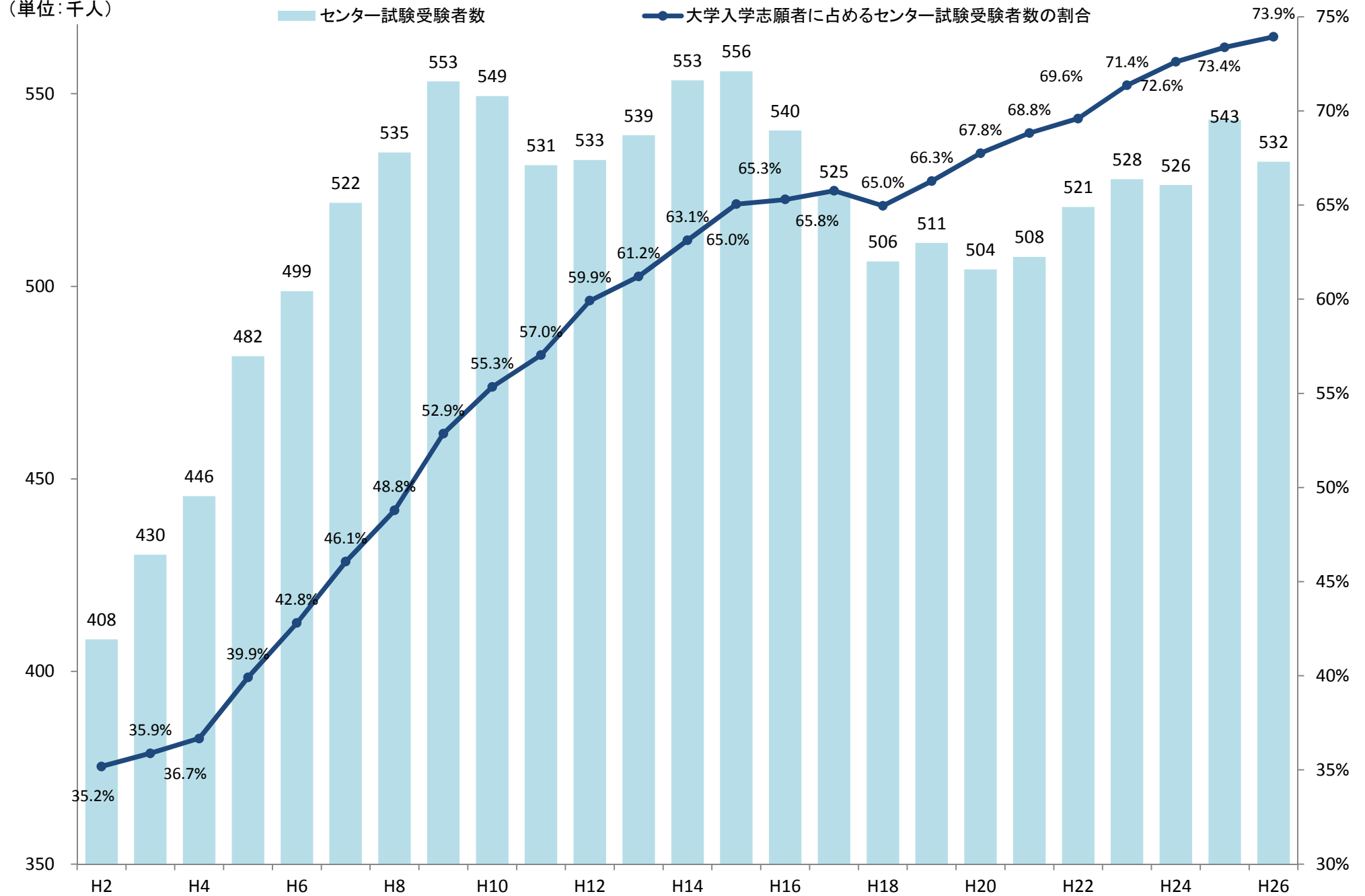
大学入試センター試験参加大学数及び志願者・受験者数の推移

- 平成2年度の第一回試験から平成27年度試験で26回目の実施(平成18年度試験から英語リスニングを実施し、平成27年度試験で10回目の実施)。
- 参加大学については、第一回から年々増加しており、平成27年度試験参加大学数は国公私合計849大学(うち160短期大学)。
- 志願者数については、平成15年度試験の602,887人がピーク。平成27年度試験の志願者数は559,132人(対前年1,540人減)。



センター試験受験者数と大学入学志願者に占めるセンター試験受験者数割合

(単位:千人)



平成27年度大学入試センター試験（本試験）科目別受験者数及び平均点について

受験者数 530,257人

教科名	科目名	受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差
国語 (200点)	国語	501,415	119.22 (59.61)	200 (100)	0 (0)	33.39 (16.69)
地理歴史 (100点)	世界史 A	1,376	47.37	100	0	19.46
	世界史 B	84,053	65.64	100	0	22.67
	日本史 A	2,409	45.64	100	0	17.82
	日本史 B	155,273	62.01	100	0	18.16
	地理 A	1,843	51.40	97	0	15.58
	地理 B	146,846	58.59	100	0	15.22
公民 (100点)	現代社会	76,698	58.99	100	0	16.70
	倫理	30,740	53.39	97	0	16.45
	政治・経済	45,300	54.79	100	0	15.66
	倫理, 政治・経済	48,659	59.57	98	0	14.82

(注1) 平均点, 最高点, 最低点及び標準偏差欄の()内の数値は, 100点満点に換算したものである。

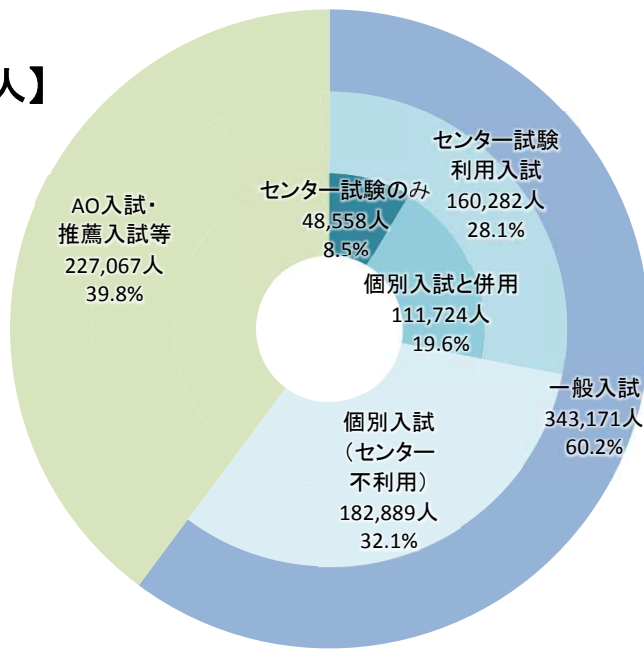
(注2) 上表の数値は, 得点調整後のものである。

教科名	科目名	受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差	
数 学	数学① (100点)	数 学 I	5,277	32.38	100	0	17.37
		数学 I ・ 数学 A	338,406	61.27	100	0	20.31
		旧 数 学 I	627	33.18	100	0	19.64
		旧数学 I ・ 旧数学 A	53,118	70.33	100	0	21.88
	数学② (100点)	数 学 II	4,944	23.83	100	0	13.61
		数学 II ・ 数学 B	301,184	39.31	100	0	20.91
		工 業 数 理 基 礎	35	55.03	92	18	20.06
		簿 記 ・ 会 計	1,266	66.50	100	2	19.92
		情 報 関 係 基 礎	462	51.95	95	14	15.62
		旧数学 II ・ 旧数学 B	51,700	49.90	100	0	23.25
理 科	理科① (50点)	物 理 基 礎	13,289	31.52 (63.04)	50 (100)	0 (0)	11.67 (23.34)
		化 学 基 礎	88,263	35.30 (70.60)	50 (100)	0 (0)	11.63 (23.26)
		生 物 基 礎	116,591	26.66 (53.32)	50 (100)	0 (0)	9.91 (19.82)
		地 学 基 礎	41,617	26.99 (53.98)	50 (100)	0 (0)	9.18 (18.36)
	理科② (100点)	物 理	129,193	64.31	100	0	22.63
		化 学	175,296	62.50	100	0	22.01
		生 物	68,336	54.99	100	0	19.08
		地 学	1,992	40.91	100	0	17.07
		理 科 総 合 A	431	57.77	96	16	16.12
		理 科 総 合 B	730	55.26	97	4	16.07
		物 理 I	29,832	69.94	100	0	20.85
		化 学 I	43,347	66.67	100	0	22.20
		生 物 I	22,026	60.87	100	0	19.75
		地 学 I	2,893	58.72	100	0	19.61
外国語	【筆記】 (200点)	英 語	523,354	116.17 (58.08)	200 (100)	0 (0)	40.96 (20.48)
		ド イ ツ 語	135	144.78 (72.39)	200 (100)	44 (22)	46.76 (23.38)
		フ ラ ン ス 語	142	148.28 (74.14)	200 (100)	43 (21)	38.05 (19.02)
		中 国 語	427	158.63 (79.31)	196 (98)	34 (17)	32.27 (16.13)
		韓 国 語	143	139.05 (69.52)	196 (98)	40 (20)	38.84 (19.42)
	【リスニング】 (50点)	英 語	516,429	35.39 (70.78)	50 (100)	0 (0)	9.77 (19.54)

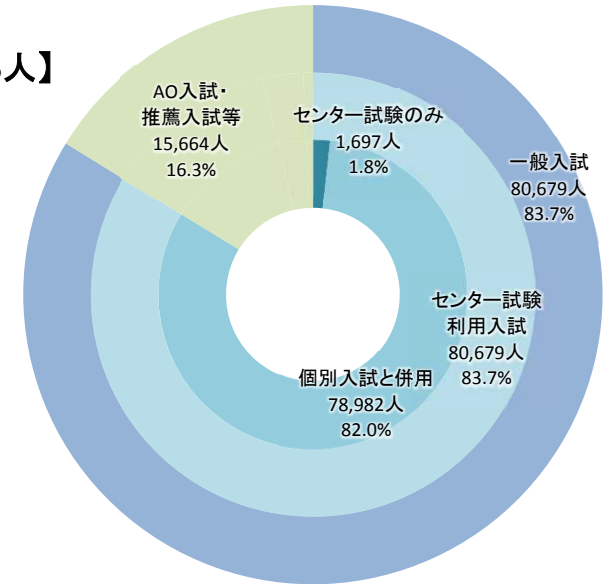
大学入試センター試験のみで合否判定を行う大学入試の状況(平成22年度入試)

国公立大学(全731大学)のうち、651大学(全大学の89.1%)がセンター試験利用入試を行い、うち、501大学(全大学の68.5%)がセンター試験のみで合否判定を行っているものの、募集人員は少ない。

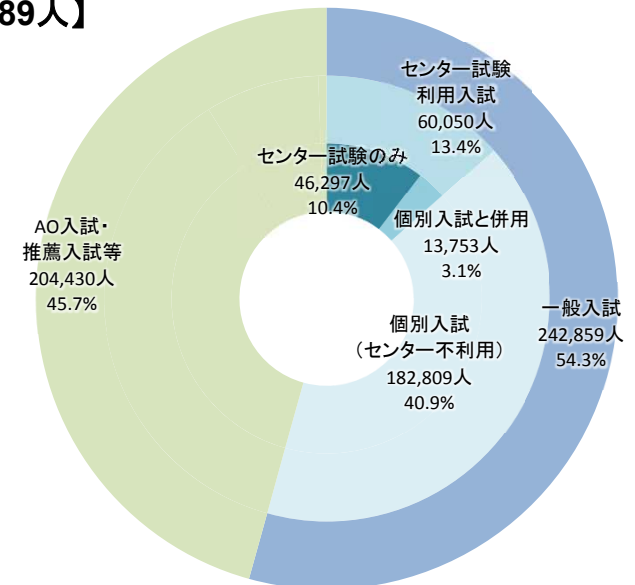
国公立計
【募集人員:570,238人】



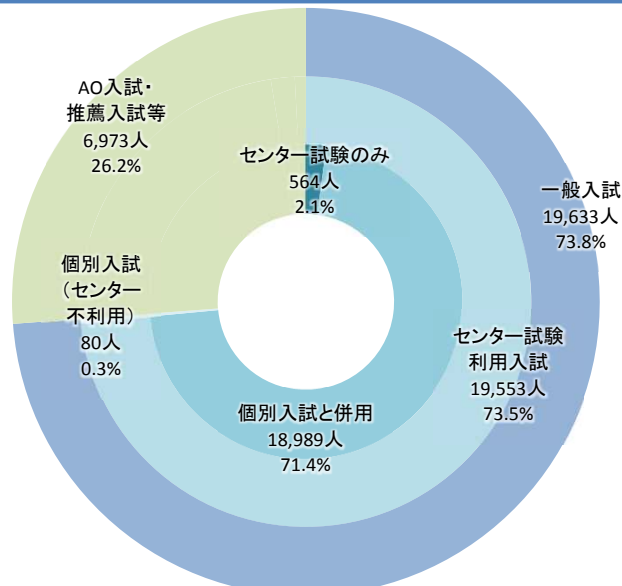
国立大学
【募集人員:96,343人】



私立大学
【募集人員:447,289人】



公立大学
【募集人員:26,606人】



注)平成22年度から公立化した静岡文化芸術大学、名桜大学は、私立大学に含む。

現行の大学入試センター試験の作問体制

2年間かけて1年度分の試験問題を作成。(本試験、追試験の2回分)
第1年次は試験問題原稿等の作成、第2年次は最終校正及び印刷を実施。

○作問関係委員会(約775人)

(1) 教科科目第一委員会

- ・大学の教員で構成、出題科目別に分かれて協議を重ね試験問題を作成。
(22部会(特別問題作成部会を除く)約500人)
- ・委員は秘匿扱いとし、任期満了から1年経過後に氏名のみ官報で公表する。

(2) 教科科目第二委員会

- ・教科科目第一委員会委員経験者で構成され、試験問題の構成、内容、正解、用字用語、採点方法等について点検。(20部会 約160人)

(3) 特別問題作成部会

- ・大学の教員で構成され、障害のある受験者のための試験問題を作成する。点字試験問題を作成。
(委員 約25人)

(4) 教科科目第三委員会

- ・大学の教員で構成され、試験問題の形式、表現、教科科目間の重複等について、それぞれ点検・照合。
(委員 約30人)

(5) 点検協力者

- ・高等学校関係者で構成され、難易度・出題範囲について点検。
(各科目2~3人程度、約60人)

<作成>
685人

<点検>
90人

○評価委員会

(1) 外部評価分科会(高等学校関係者で構成)

- ・試験問題の内容、程度、出題方法等の評価を実施。

(2) 自己点検・評価分科会(問題作成委員で構成)

- ・外部評価分科会及び全国の教科・科目別の教育研究団体(17団体)の評価等を受けて自己点検・評価を実施。

平成28年度大学入学者選抜日程

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	----	----	----

A O 入 試

推 薦 入 試

国
公
立
大
学

私
立
大
学

「大学入学者選抜実施要項」を各大学に通知(局長通知)

平成27年6月1日～7月31日
選抜要項の発表(各大学)

平成27年9月下旬～10月上旬
大学入試センター試験の出願受付

平成27年12月15日まで
募集要項の発表(各大学)

大学入試センター試験
平成28年1月16・17日
※1月22日 得点調整実施の有無の発表
(追試 1月23・24日)

平成28年1月25日～2月3日
出願受付

平成28年2月25日～
前期日程試験

(公立)平成28年3月1日～10日
(国立)平成28年3月6日～10日
前期日程の合格発表

平成28年3月8日～
中期日程試験

平成28年3月12日～
後期日程試験

(後期)平成28年3月20日～24日
(中期)平成28年3月20日～23日
中期・後期日程の合格発表

(各大学で独自に設定)
試 験
合 格 発 表

A O 入 試

推 薦 入 試

先行調査で評価しようとしている能力等(思考力・判断力・表現力等)の例

I. 特定の課題に関する調査 (論理的な思考) 【国立教育政策研究所】

＜論理的に思考する過程での活動＞

- ①規則、定義、条件等を理解し適用する
資料から読み取ることができる規則や定義等を理解し、それを具体的に適用する
- ②必要な情報を抽出し、分析する
多くの資料や条件から推論に必要な情報を抽出し、それに基づいて分析する
- ③趣旨や主張を把握し、評価する
資料は、全体としてどのような内容を述べているかを適確にとらえ、それについて評価する
- ④事象の関係性について洞察する
資料に提示されている事象が、論理的にどのような関係にあるのかを見極める
- ⑤仮説を立て、検証する
前提となる資料から仮説を立て、他の資料などを用いて仮説を検証する
- ⑥議論や論証の構造を判断する
議論や論争の論点・争点について、前提となる暗黙の了解や根拠、また、推論の構造などを明らかにするとともに、その適否を判断する

※上記①～⑥のそれぞれの活動において、思考の過程や結論を適切に表現することを評価する問題も併せて出題

II. 全国学力・学習状況調査 【文部科学省】

【主として「活用」に関する問題の基本理念】

- ・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
- ・様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力など

○国語では、実生活の具体的な場面や生徒が授業などで実際に行っている言語活動を想定

○数学では、次のような数学的なプロセスを整理

- ・日常的な事象等を数学化すること
- ・情報を活用すること
- ・数学的に解釈することや表現すること
- ・問題解決のための構想を立て実践すること
- ・結果を評価し改善すること
- ・他の事象との関係を捉えること
- ・複数の事象を統合すること
- ・事象を多面的に見ること

III. PISA調査(3分野) 【OECD】

【読解力】＜読む行為の側面＞

- ①情報へのアクセス・取り出し
情報を見つけ出し、選び出し、集める
- ②テキストの統合・解釈
テキストの中の異なる部分の関係を理解し、推論によりテキストの意味を理解する
- ③テキストの熟考・評価
テキストと自らの知識や経験を関連付けたり、テキストの情報と外部からの知識を関連付けたりしながら、テキストについて判断する

【数学的リテラシー】
＜数学的プロセスの側面＞

- ①定式化
数学を応用し、使う機会を特定することを含めて、提示された問題や課題を数学によって理解し、解決することができること
- ②適用
数学的に推論し、数学的概念・手順・事実・ツールを使って数学的に問題を解決すること
- ③解釈
数学的な解答や結果を検討し、問題の文脈の中でそれらを解釈すること

【科学的リテラシー】
＜科学的能力の側面＞

- ①科学的な疑問を認識する能力
与えられた状況において科学的に調査できるような疑問を認識すること
- ②現象を科学的に説明する能力
現象を科学的に記述し、解釈し、変化を予測すること
- ③科学的な証拠を用いる能力
科学的証拠を解釈し、結論を導き、伝達すること、結論の背景にある仮定や証拠、推論を特定すること

IV. PISA調査 (問題解決能力調査) 【OECD】

＜問題解決のプロセスの側面＞

- ①探究・理解
問題状況を観察し、情報を探究して、制約又は障壁を見つけ出す。与えられた情報及び問題状況を通じて、見つけ出した情報を理解していることが示される
- ②表現・定式化
問題状況の各側面を表現するために、表やグラフ、記号、言語を用いる。関連要素とその相互関係に関する仮説を立てる
- ③計画・実行
最終的な目標及びそれに向けての小さな目標を設定し、問題を解決するための計画又は方法を決定して、それに従い実行する
- ④観察・熟考
問題解決へと至るそれぞれの段階・過程を観察する。途中経過を確認し、想定していない出来事と遭遇した場合、必要な処置を行う。解決に至る方法を様々な観点から熟考し、想定や別の解決策を批判的に評価し、追加情報や明確化の必要性を認識し、進捗状況を適切な方法で報告する

「英語」において特に重視すべき思考力・判断力・表現力等の例（仮案）

「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能を総合的に、また、複数の技能を統合的に活用し、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする思考力、判断力、表現力。

(例)

〈「聞くこと」〉

- まとまりのある英文、比較的長い対話文、スピーチ、プレゼンテーション、講義などを聞き、複数の情報を整理するなど思考・判断して、必要な情報を得たり概要や要点を把握したりする力。

〈「読むこと」〉

- まとまりのある英文、比較的長い対話文、英語で書かれた図表などを読み、複数の情報を整理・統合するなど思考・判断して、必要な情報を得たり概要や要点を把握したりする力。

〈「話すこと」〉

- 多様な考え方ができる話題や時事問題・社会問題などについて話して説明するとともに、自分の意見や考えなどをまとめ、適切な語彙・表現・文法を用いて論理的・批判的に話して伝える力。

〈「書くこと」〉

- 多様な考え方ができる話題や時事問題・社会問題などについて、自分の意見や考えなどをまとめ、論点や根拠を明確にしながら、適切な語彙・表現・文法を用いて論理的・批判的に書いて伝える力。

〈技能統合型〉（4技能のうち2技能以上を統合的に活用）

- 聞いたり読んだりして得た情報（英文や図表など）について、その概要や要点を的確に把握するとともに、自分の意見や考えなどとの共通点や相違点などを示しながら、論理的・批判的に話したり書いたりして表現する力。

各専攻分野を通じて培う学士力 ～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～

(「学士課程教育の構築に向けて」(平成20年12月24日中央教育審議会答申)より)

学士課程の各専攻分野を通じて培う力。教養を身に付けた市民として行動できる能力。

～学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針～

1. 知識・理解

専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。

(1) 多文化・異文化に関する知識の理解

(2) 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解

2. 汎用的技能

知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能

(1) コミュニケーション・スキル

日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。

(2) 数量的スキル

自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる。

(3) 情報リテラシー

情報通信技術(ICT)を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。

(4) 論理的思考力

情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる。

(5) 問題解決力

問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる。

3. 態度・志向性

(1) 自己管理力

自らを律して行動できる。

(2) チームワーク、リーダーシップ

他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる。

(3) 倫理観

自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。

(4) 市民としての社会的責任

社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる。

(5) 生涯学習力

卒業後も自律・自立して学習できる。

4. 統合的な学習経験と創造的思考力

これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力

これからの目指すべき社会像と求められる能力

(「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(平成24年8月28日中央教育審議会答申)より)

これからの目指すべき社会像と求められる能力

○我が国の目指すべき社会像

優れた知識やアイデアの積極的活用によって発展するとともに、人が人を支える
安定的な成長を持続的に果たす成熟社会

⇒ 「知識を基盤とした自立、協働、創造モデル」

○成熟社会において求められる能力（学士力）

- ・ 知識や技能を活用して複雑な事柄を問題として理解し、答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力をはじめとする認知的能力
- ・ 人間としての自らの責務を果たし、他者に配慮しながらチームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担いうる、倫理的、社会的能力
- ・ 総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力
- ・ 想定外の困難に際して的確な判断ができるための基盤となる教養、知識、経験
⇒ 予測困難な時代において高等教育段階で培うことが求められる「学士力」

現在の高等学校の教科・科目構成(全学科共通教科等)

教科	科目	標準 単位数	必履修 科目
国語	国語総合	4	○2単位まで減可
	国語表現	3	
	現代文A	2	
	現代文B	4	
	古典A	2	
	古典B	4	
地理 歴史	世界史A	2	┌ ○ └ ┌ ○ └ ┌ └
	世界史B	4	
	日本史A	2	
	日本史B	4	
	地理A	2	
	地理B	4	
公民	現代社会	2	「現代社会」又は 「倫理」・「政治・経 済」
	倫理	2	
	政治・経済	2	
数学	数学Ⅰ	3	○2単位まで減可
	数学Ⅱ	4	
	数学Ⅲ	5	
	数学A	2	
	数学B	2	
	数学活用	2	
	理科	科学と人間生活	
物理基礎		2	
物理		4	
化学基礎		2	
化学		4	
生物基礎		2	
生物		4	
地学基礎		2	
地学		4	
理科課題研究		1	

教科	科目	標準 単位数	必履修 科目
保健 体育	体育	7~8	○ ○
	保健	2	
芸術	音楽Ⅰ	2	┌ └ ┌ ○ └ ┌ └ ┌ └ ┌ └ ┌ └
	音楽Ⅱ	2	
	音楽Ⅲ	2	
	美術Ⅰ	2	
	美術Ⅱ	2	
	美術Ⅲ	2	
	工芸Ⅰ	2	
	工芸Ⅱ	2	
	工芸Ⅲ	2	
	書道Ⅰ	2	
	書道Ⅱ	2	
	書道Ⅲ	2	
外国語	コミュニケーション英語基礎	2	○2単位まで減可
	コミュニケーション英語Ⅰ	3	
	コミュニケーション英語Ⅱ	4	
	コミュニケーション英語Ⅲ	4	
	英語表現Ⅰ	2	
	英語表現Ⅱ	4	
	英語会話	2	
家庭	家庭基礎	2	┌ ○ └ ┌ ○ └
	家庭総合	4	
	生活デザイン	4	
情報	社会と情報	2	┌ ○ └
	情報の科学	2	
総合的な学習の時間		3~6	○

特別活動は単位数が設定されていない。ホームルーム活動に年間35単位時間以上、生徒会活動及び学校行事については、学校の実態に応じて、それぞれ適切な授業時数を充てることとされている。

下記のような構造をイメージしながら、各教科等の意義や教科・科目等の構成、各教科・科目等の内容を見直す必要があるのではないか。その際、教える側の視点だけでなく学習する側の視点にも立ち、学習プロセスの在り方や身に付ける資質・能力等について整理していく必要があるのではないか。

人格の完成を目指す

教科横断的・総合的に育成すべきさまざまな資質・能力

知識・技能

思考力・判断力・表現力

学習意欲

個別の知識や技能
(何を知っているか、
何ができるか)

**教科等の本質に根ざした
見方や考え方等**
(知っていること・できることをどう使う
か)

**情意、態度等に
関わるもの**
(どのように社会・世界と関わり
よりよい人生を送るか)

教科学習

※資料○参照

各教科に固有の知識や
個別のスキル

各教科の本質に根ざした問題解決
の能力、学び方やものの考え方

各教科を通じて育まれる情意、態
度等

総合的な学習

(各学校で設定)

横断的・総合的な問題解決の能力

実社会における横断的・総合的な
問題解決に取り組む態度

特別活動

集団の運営に関する方法や基本的
な生活習慣等

よりよい集団の生活や自己の生活
習慣等を形成していく能力

自己の役割や責任を果たす態度等

道徳教育

道徳的価値

道徳的な判断力

道徳性

総合的に育成する学習プロセス

教科等間の往還
(カリキュラム・マネジメント)

公民科目の今後の在り方について（検討素案）

平成27年6月22日
教育課程部会
資料1-6（抜粋）

課題

①積極的に社会参加する意欲が国際的に見て低い

②現代社会の諸課題等についての理念や概念の理解、情報活用能力、自己の生き方等に結びつけて考えることに課題

③課題解決的な学習が十分に行われていない

④キャリア教育の中核となる時間の設定

資質・能力

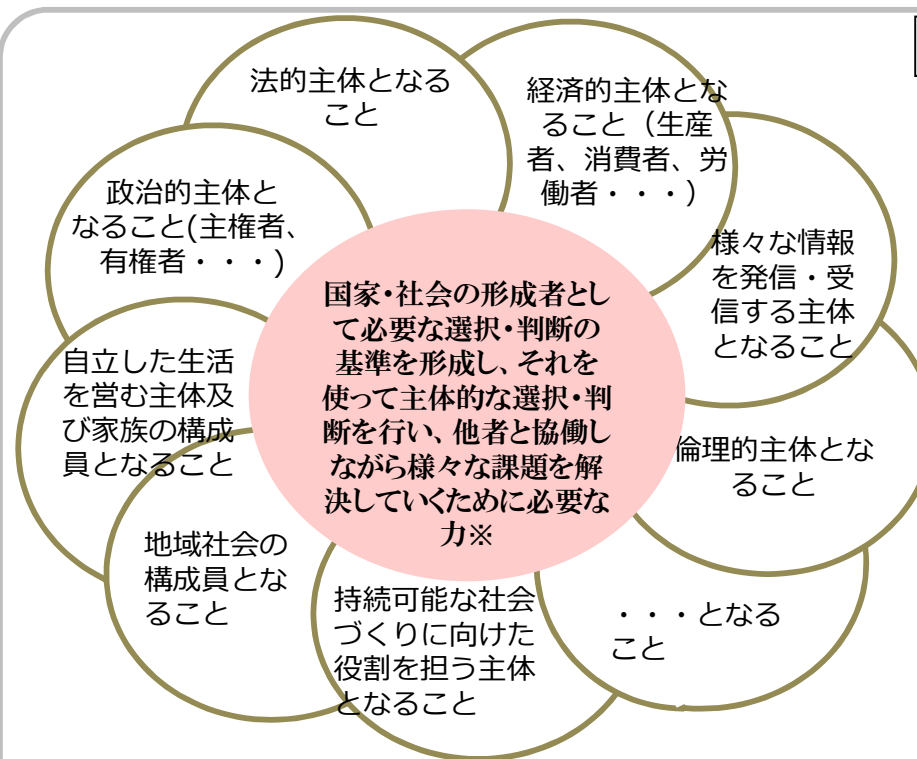
○立場によって意見の異なる様々な課題について、その背景にある考え方を踏まえてよりよい課題解決の在り方を協働的に考察し、公正に判断、合意形成する力

○様々な課題を捉え、考察するための基準となる概念や理論を習得する力

○公共的な事柄に自ら参画しようとする意欲や態度

○現代社会に生きる人間としての在り方生き方についての自覚

（新科目のイメージ）



学習活動の例

討論、ディベート
模擬投票、模擬選挙
模擬裁判
外部の専門家の講演
新聞を題材にした学習
体験活動、インターンシップの準備と振り返り …

関係する専門家・機関

弁護士
選挙管理委員会
消費者センター
報道機関
留学生
企業 経済団体
起業家
NPO、NGO …

「公共」の扉（なぜ「公共」を学ぶのか）＜仮＞

社会的・職業的な自立や社会参画に向けた意識 アイデンティティー 自己実現 …

様々な主体としての私たちの生き方＜仮＞

社会保障（年金、健康保険等） 情報 消費行動 契約 財政と納税 雇用 政治参加（選挙等） 家族（制度的側面など） 自由・権利 責任・義務 …

持続可能な社会づくりの主体としての私たち＜仮＞

文化と宗教の多様性 国際平和 社会的な課題発見・解決に向けた探究 …

＜参考＞

・学校における道徳教育は、…人間としての在り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行うことにより、その充実を図るものとし、各教科の属する科目、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、適切な指導を行わなければならない。（「高等学校学習指導要領総則第1款 教育課程編成の一般方針」）

現行歴史系A科目

課題

資質・能力

新科目のイメージ

世界史A

- 1 世界史へのいざない
- 2 世界の一体化と日本
- 3 地球社会と日本

関連付け

日本史A

- 1 私たちの時代と歴史
- 2 近代の日本と世界
- 3 現代の日本と世界

①世界史や日本史の学習は大切だと考える生徒は増加。一方、近現代史の学習の定着状況が、他の指導内容に比べて低い傾向。

②世界史か日本史かの二者択一ではなく、グローバルな視野で現代世界とそこでの日本の過去と現在、未来を考える歴史認識を培うことが必要との指摘。

③調べたことを発表させる活動や課題解決的な学習を取り入れた授業等が十分に行われていない。

○自国のこと、グローバルなことを、横断的・相互的にとらえる力

○現代社会の形成過程を理解し、その諸課題を考察する力

○持続可能な社会作りに参画する態度

○国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚

自国のこと、グローバルなことが影響しあったり、つながったりする歴史の諸相を学ぶ科目

- 日本の動向と世界の動きを関連付けて捉える。
- 現代的な課題につながる時代区分における、歴史の転換点等を捉えた学習を中心とする
- 歴史の転換の様子を捉える「継続と変化」、因果関係を捉える「原因と結果」、特色を捉える「類似と差異」などの、歴史の考察を促す概念を重視する
- 歴史の中に「問い」を見出し、資料に基づいて考察し、互いの考えを交流するなど、歴史の学び方を身に付ける

<参考>

現行中学校社会科の歴史的分野の学習では、我が国の歴史の大きな流れの理解をねらいとしている。（各時代の特色を捉える学習他）

現行地理A科目

課題

資質・能力

新科目のイメージ

地理A

(1)現代世界の
特色と諸課題の
地理的考察

(2)生活圏の諸課題の
地理的考察

①地理は選択必修で、選択者も世界史、日本史に比べて少ないことから、最低限の地理的技能をもたず高校を卒業する者が多い。

②地球環境の危機や防災に関する教育の必要性、地理的思考力や地理情報システム(GIS)などを利活用できるスキルの育成等が重要であるとの指摘。

③観察や調査・見学、体験を取り入れた授業等が十分に行われていない。

- 地理的な技能
「実践的な社会的スキルとしてのGIS活用」
- 地理的知識と地理的理解
「地球規模(グローバル)の自然システム、社会・経済システムの知識と理解」
- 地理的な見方や考え方
「空間概念を捉える力」
- 態度と価値観
「地域、国家的及び国際的な課題解決を模索する献身的努力」

(「ルツェルン宣言における『持続可能な開発を實行する地理的能力』による」)

持続可能な社会づくりに必須となる地球規模の諸課題や、地域課題を解決する力を育む科目

- 地図や地理情報システムなどの汎用的な地理的技能の育成
- 位置と分布、場所、地域などの概念を捉える地理的な見方や考え方の育成
- グローバルな視点からの地域理解と課題解決的な学習の展開
- 持続可能な社会づくりに関わる資質・能力を育み、以降の地理学習等の基盤を形成

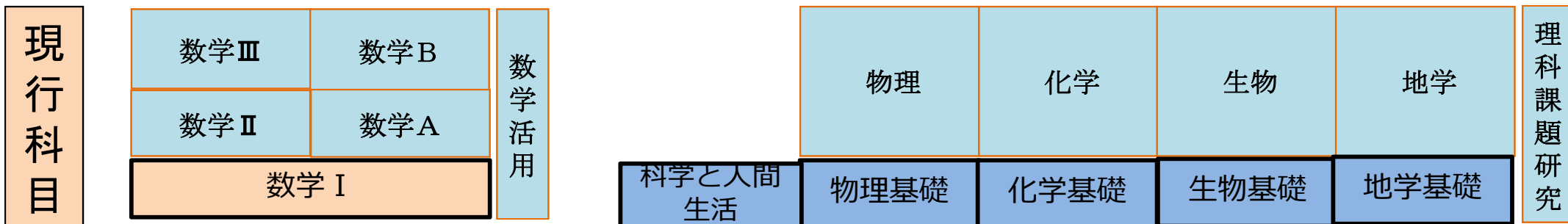
<参考>

- ・中学校の地理的分野において充実した地誌学習により獲得した知識等を活用し、国内外の諸課題等を主題的に扱う。
- ・本科目履修後の地理歴史科の科目や他教科において活用できる、GISをはじめとする地理的な技能や、世界のグローバル化、持続可能な社会づくりといった考え方を身に付けさせる。

理数科目の今後の在り方について（検討素案）

平成27年6月22日
教育課程部会
資料1-6（抜粋）

普通科の場合



- ・ 数学活用：指導内容と日常生活や社会との関連及び探究する学習を重視。
- ・ 理科課題研究：知識・技能を活用する学習や探究する学習を重視。先端科学や学際的領域に関する研究なども扱える。
- ・ 課題研究等の活動は生徒の論理的な思考を育成する効果が高いが、あまり開講されていない状況。（1割未満）
- ・ スーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）で設定されている「サイエンス探究」等では、数学と理科で育成された能力を統合し、課題の発見・解決に探究的に取り組むことで高い教育効果。

【諮問文】より高度な思考力・判断力・表現力等を育成するための
新たな教科・科目の在り方について検討

資 質 ・ 能 力

○従来の数学と理科の各教科で求められていた資質・能力を統合した科学的な探究能力の育成を図る

◎専門的な知識と技能の深化、総合化を図り、より高度な思考力、判断力、表現力の育成を図る

○課題に徹底的に向き合い、考え抜いて行動する力の育成を図る

SSHにおける取組み事例なども参考にしつつ、数学と理科の知識や技能を総合的に活用して主体的な探究活動を行う新たな選択科目

改善の視点（案）

〔全体的な課題〕

- ・他教科等で活用できる汎用的なスキルを育成する必要がある。
- ・依然として、教科書教材に依存した、講義調の伝達型授業が中心となっている。

〔主にコミュニケーション能力に関する課題〕

- ・話合いや論述など、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習指導が低調で、生徒のコミュニケーション能力の育成に課題がある。
- ・生徒の論理的な思考力（特に文章の内容を根拠に基づいて評価し、目的に応じて活用する力）に課題がある。
- ・静止画や動画における表現者の意図を解釈する力など、時代に対応したビジュアルリテラシーを育成することが必要。

〔主に言語文化に関する課題〕

- ・これまで継承され、実生活の中で形成されてきた言語文化についての深い理解や関心を高める学習に課題がある。（言語文化への興味・関心を高めるA科目の開設率が低い。）
- ・文法や古語など知識・理解の学習に偏る傾向があり、古典への興味・関心を高める学習指導に課題がある。
- ・学習指導が教科書教材の読解に偏る傾向があり、文学的文章の創作等の言語活動が十分行われておらず、想像力・創造力の育成に課題がある。

選択科目の在り方

現代文を中心に古文・漢文を含めて扱うなど、総合的な国語の能力を育成すること

論理的な文章（論説文・評論文、小論文等）を読んだり書いたりする力を育むこと

文学的な文章（小説、随筆・随想、脚本等）を読んだり書いたりする力を育むこと

古文・漢文等への理解を深め、言語文化への関心を高めること

共通必修科目の在り方

実社会・実生活に生きる国語の能力の育成

- ・「話すこと・聞くこと」「書くこと」といった、表現に関わる能力の育成
- ・話合いや論述などの活動の重視
- ・静止画や動画も含む多様な表現の扱い

古典を含む我が国の言語文化に関する理解等を深めること

- ・古典に関わる言語文化についての理解と活用
- ・古典以外の文章に関わる言語文化についての理解と活用

検討の方向性（案）

英語科目の今後の在り方について（検討素案）

平成27年6月22日
教育課程部会
資料1-6（抜粋）

現行科目

コミュニケーション英語基礎

コミュニケーション英語Ⅰ

コミュニケーション英語Ⅱ

コミュニケーション英語Ⅲ

英語表現Ⅰ

英語表現Ⅱ

英語会話

課題

（必修）

- ・生徒の英語力について、4技能全般、特に「話すこと」と「書くこと」の能力が課題
- ・英語の学習意欲に課題
- ・言語活動、特に、統合型の言語活動（例：聞いたり読んだりしたことに基づいて話したり書いたりする活動）が十分ではない
- ・グローバル時代において、英語学習に関する生徒の多様化への対応が必要

発信力が弱い

資質・能力

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、日常的な話題から時事問題や社会問題まで幅広い話題について、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を養う

科目の在り方

英語による「思考力・判断力・表現力を高める見直し」

4技能統合型（必修科目を含む）の科目を核とする科目

- ・4技能総合型
- ・複数の技能を統合させた言語活動が中心

世界標準になっているCEFRを参考に、指標形式での目標設定を検討

発信能力の育成をさらに強化する科目

- ・スピーチ、プレゼンテーション、ディベートやディスカッションなど、統合型言語活動が中心

高度化・多様化

生徒が実社会や実生活の中で、自らが課題を発見し、主体的・協働的に探求し、英語で考えや気持ちを互いに伝え合うことを目的とした学習

改訂の方向性（案）

共通教科「情報」（現行）

社会と情報

- 1 情報の活用と表現
- 2 情報通信ネットワークとコミュニケーション
- 3 情報社会の課題と情報モラル
- 4 望ましい情報社会の構築

いずれか1科目（2単位）を選択必修

情報の科学

- 1 コンピュータと情報通信ネットワーク
- 2 問題解決とコンピュータの活用
- 3 情報の管理と問題解決
- 4 情報技術の進展と情報モラル

改訂の必要性

高度な情報技術の進展に伴い、文理の別や卒業後の進路を問わず、**情報の科学的な理解に裏打ちされた情報活用能力**を身に付けることが重要

育成する資質・能力 「情報活用能力」

- 情報とそれを扱う技術を問題の発見・解決に活用するための科学的な考え方
- 情報通信ネットワークを用いて円滑にコミュニケーションを行う力
- 情報機器やネットワークを用いて情報を収集・加工・発信する力
- 情報モラル、知的財産の保護、情報安全等に対する実践的な態度
- 情報社会に主体的に参画し寄与する能力と態度

新科目のイメージ

情報と情報技術を用いた問題の発見と解決に活用するための科学的な考え方等を育成する科目

- コンピュータと情報通信ネットワーク
- 問題解決の考え方と方法
- 問題解決とコンピュータの活用
- 情報社会の発展と情報モラル

上記科目の履修を前提とした発展的な内容の科目についても検討

※情報モラルなど、社会生活を営むに当たり必要な知識や果たすべき役割等については、新たな公民科目で扱うことを検討。

関連して、現行中学校技術・家庭（技術分野）における「情報に関する技術」の指導内容の充実、及び小・中学校段階からの各教科等における情報活用能力を育成するための指導の充実についても、検討が必要。

（次ページ「小・中・高等学校を通じた情報活用能力の育成」を参照（略））

問題発見・解決力のための分析的読解による連動型複数選択問題方式

問題発見・解決の考え方や事例を含む複数の文章を読み、そこで語られている考え方・取り組み方の共通パターンを分析して回答する問題。回答においては、「状況」「問題」「解決」など、お互いに連動する複数の選択肢群からそれぞれ選択肢を選び、その組み合わせが正しく選択できているかを採点する。正答となる組み合わせは、複数可能とする。

問題発見
解決力

様々な分野における問題発見・解決の考え方や事例を扱う。

分析的読解

複数の文章を読み、そこで語られている内容の共通パターンを分析する。

連動型
複数選択問題

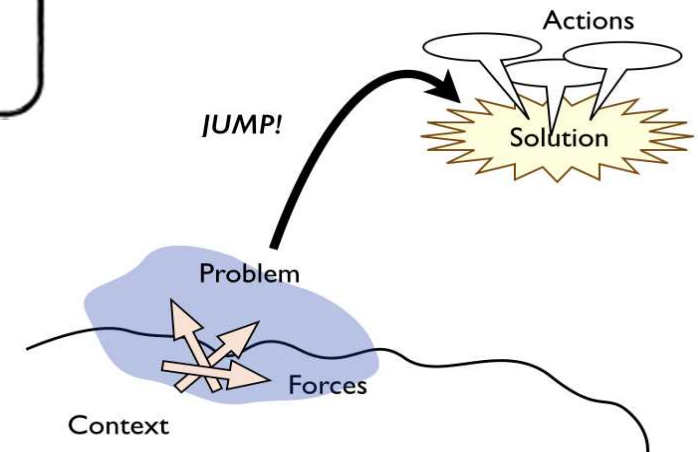
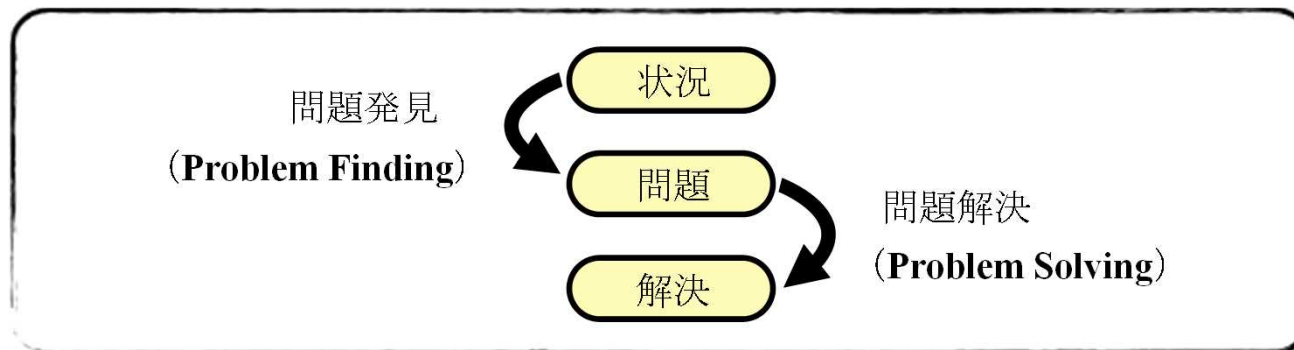
「状況」「問題」「解決」など、お互いに連動する複数の選択肢群からそれぞれ選択肢を選び、その組み合わせで回答する。

問題発見 解決力

様々な分野における問題発見・解決の考え方や事例を扱う。

実践における問題発見・問題解決のパターンの分析・活用

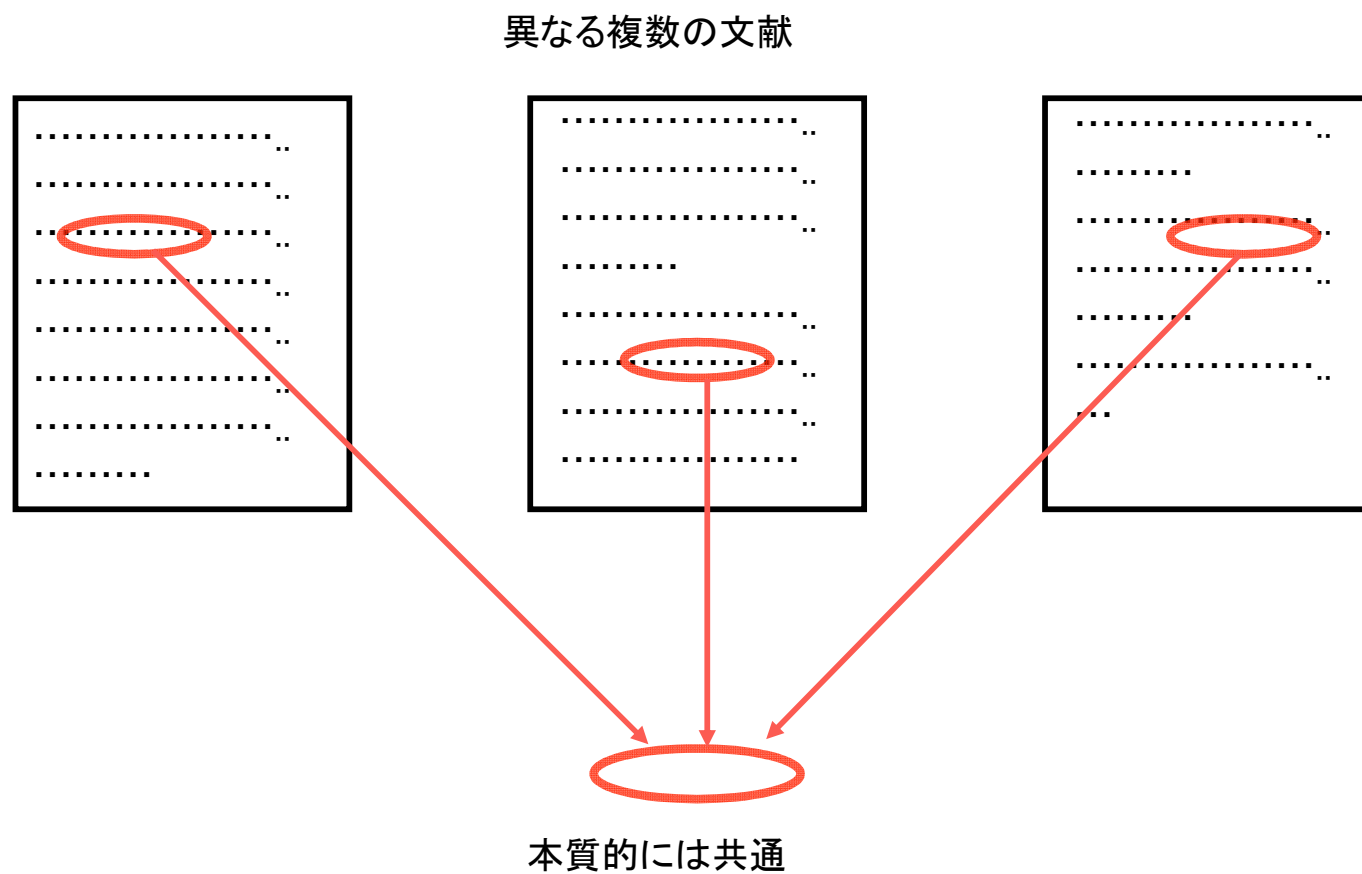
- ・ どのような状況 (Context) のときに
- ・ どのような問題 (Problem) が生じやすく
- ・ それをどのように解決すればよいのか (Solution)



分析的読解

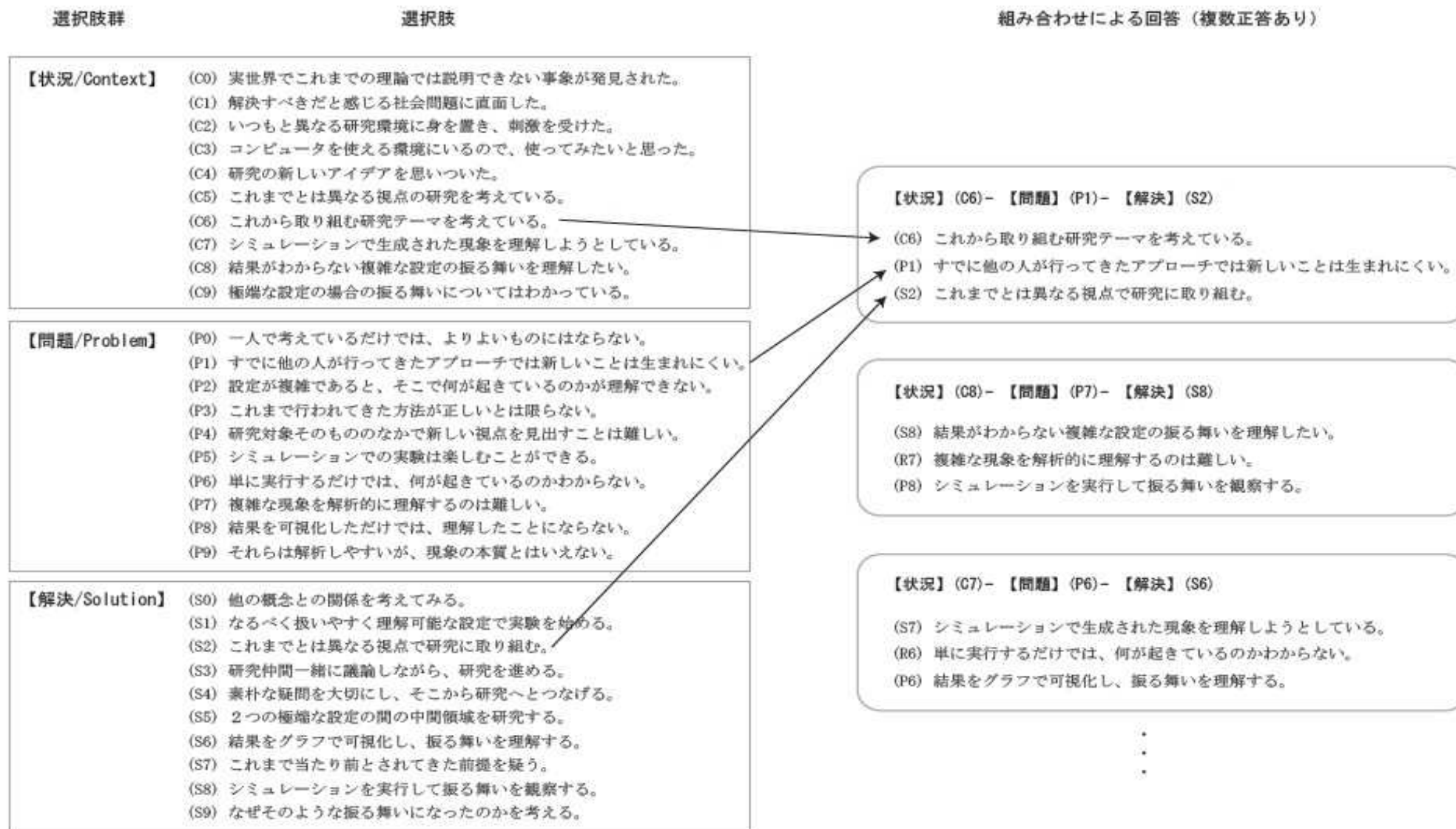
複数の文章を読み、そこで語られている内容の共通パターンを分析する。

本質の分析的抽出と、異なる事例でのアナロジー



連動型
複数選択問題

「状況」「問題」「解決」など、お互いに連動する複数の選択肢群からそれぞれ選択肢を選び、その組み合わせで回答する。



等化の代表的な方法

○ 等化とは、同一の仕様 (specification) に基づき開発される問題項目の内容が異なる複数のテストにおいて、受検したテスト結果を共通の尺度上の得点で表現し、複数のテストの受検者間で得点を相互に比較することを可能にする統計的操作のこと (同一の仕様とは、測定する能力、問題の種類、問題の形式、テスト時間などが等しくなるように設計されているということ)。

○ テスト等化の条件 (a~eのいくつかが満たされない関連づけは「対応づけ」と呼ぶ場合もある)

- a. 測定対象となる構成概念が同一であること
- b. 信頼性が等しいこと
- c. 対称性が保たれていること
- d. どちらのテストを受けても同等であること
- e. 母集団不変であること

等化の方法	概要	メリット	課題
項目反応理論 (IRT)における等化	<ul style="list-style-type: none"> ・同一の能力を測定する複数のテスト結果を、相互に比較可能な得点 (数値) で表すことができる共通の尺度を作成する方法。 ・測定すべき集団の能力分布の性質あるいは測定対象となる心理特性の分布の性質と測定用具としてのテストの性質を分離して扱いきわめて自由度の高い等化が可能。 	CBTと組み合わせれば <ul style="list-style-type: none"> ・複数のテスト間の結果の比較を容易にする。 ・測定精度をきめ細かく確認できる。 ・平均点をテスト実施前に制御できる。 ・受験者毎に最適な問題を瞬時に選び、その場で出題できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大量の項目プールの作成が必要であるため、IRTが適用可能な項目を継続的に供給し、項目プールを維持していくことが必要である。
等パーセンタイル等化法	<ul style="list-style-type: none"> ・2つのテストの得点の累積分布を比較することにより、一方の得点を同じ累積パーセントになる他方の試験の得点に変換する方法 (テストXの得点分布をテストYの得点分布に変換するものであり、スコア分布の形まで一致させることを目指している)。 ・結果として2つのテストのパーセンタイル順位が等しくなるように等化する方法。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2つのテストの得点分布に関係なく等化が可能。線形等化法と異なり、上限と下限の素点を越えることができない。最高点・最低点がテスト間で対応している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・被験者の得点が低得点から高得点まで幅広く分布している必要がある。 ・あるテストから別のテストへ等化した場合、元のテストの最高点は移行するテストの最高点を越えることができない。 ・大規模試験においては等パーセンタイル等化法が行えるシステムが必要 (手作業では限界がある)。
線形等化法	<ul style="list-style-type: none"> ・2つのテストの得点分布の形が同じであり、平均と標準偏差のみが異なると仮定し等化する方法 (線形変換によって、テストXの平均と標準偏差をテストYの平均と標準偏差に揃えるもの)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2つのテストフォームの得点分布間に単純な仮定において等化することが可能なため適用しやすい。 ・分布の形は等化後も変化しないため分布の裾部分で受検者の識別が等化後も可能。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2つのテストで分布の形が大きく違っている場合は、例えば難易度が高いテストで高得点を取った者がより強調されてしまう。

※等化には、①複数のテストのそれぞれの受験者集団が同じ母集団からの確率標本であること、②複数のテストの中に共通な下位テスト (係留テスト: anchor test) が含まれている、③複数のテストを2つ以上受けた共通の受検者集団が存在するのいずれかの条件を満たしたデータが必要

各国の大学入学者選抜に係る共通試験について

国名	ドイツ	フランス	イギリス	アメリカ		韓国	日本
共通試験	アビトゥーア試験	バカロレア試験	GCE ALレベル	SAT	ACT	大学修学能力試験	大学入試センター試験
試験回数・時期	1回。2～4月(記述式)と3～6月(口述式)	1回。6月(9月に振替試験を実施)	1回。5～6月 ※1月試験は2013年1月の実施を最後に廃止	7回(10、11、12、1、3、5、6月)	6回(9、10、12、2、4、6月)	1回。11月	1回。1月(+追試験)
解答方式	記述式+口述式	記述式+口述式	記述式	マークシート式+記述式(エッセイ)	マークシート式+記述式(エッセイ、ただしオプション)	マークシート式	マークシート方式
試験方式	PBT(紙媒体)方式	PBT(紙媒体)方式	PBT(紙媒体)方式	PBT(紙媒体)方式	PBT(紙媒体)方式	PBT(紙媒体)方式	PBT(紙媒体)方式
設定科目数	州により異なる。 ※3領域(言語・文学・芸術/社会科学/数学・自然科学・技術)から5科目又は4科目を選択。うち1科目は口述試験。	取得を目指すバカロレアの種類により異なるが、リセ(高校)で学習した科目を網羅。 ※普通(3コース)及び技術(8コース)は予備試験と本試験で必修10科目程度と自由選択2科目。職業(80以上の専門領域)は必修7科目と自由選択1科目。	実施機関ごとに異なる。Edexcelの2012年夏実施科目の場合、54科目 ※通常3科目程度を選択。	3領域(言語能力/ライティング/数学能力) 5分野(英語/歴史・社会学/数学/自然科学/外国語[リーディング、リスニング])20種類 ※難関大学において2科目程度必要。	4領域(英語/数学/読解/サイエンス)	7領域(国語、数学、英語、社会探求、科学探求、職業探求、第2外国語/漢文)46科目	6教科29科目
実施主体	各州教育担当省	国民教育省	政府から独立した試験実施機関(Examining Board)	実施主体であるCollege Board(大学協会)がETS(教育テスト事業団)に委託	ACT Inc(アメリカ大学テスト会社)	韓国教育課程評価院	独立行政法人大学入試センター
主な①試験会場、②試験監督者、③採点者	①ギムナジウム(大学進学者が修学する中等教育機関)、②ギムナジウム教員、③ギムナジウム教員	①リセ(高校)、②リセ教員、③リセ教員	①中等学校、②中等学校教員、③Examining Boardが雇用した者	①ハイスクール、コミュニティ・カレッジ、②不明、③ETS	①ハイスクール、コミュニティ・カレッジ、②不明、③ACT	①高校(在学中の高校ではない)又は中学校、②高校教員又は中学校教員、③教育課程評価院	①試験参加大学、②大学教員、③大学入試センター
合格率	バーデン・ヴュルテンベルク州(2013年度)の場合 一般ギムナジウム:98.1% 職業ギムナジウム:95.4%	86.8%(2013年)	個別の大学が選抜に利用	個別の大学が選抜に利用	個別の大学が選抜に利用	個別の大学が選抜に利用	個別の大学が選抜に利用
入学時期	10月	9月	主に9月	主に9月	3月	4月	4月

各国の共通試験における成績表示方法について

アメリカ

①SAT

- Critical reading (言語能力)、Math (数学能力)、Writing (文章表現、エッセイを含む) の3領域。
- 素点ではなく、500点が平均点になるよう調整した上で各領域200～800点の間で10点刻みで表示(61段階)。エッセイは2～12点の11段階(Writingのサブスコア)。
- 3領域の合計2400点満点(600～2400点の181段階)。
- SATは2016年からの改訂が決定し、ACTにより近づく。エッセイがオプションになり、高校の教科科目を重視。

②SAT Subject Tests

- 難関大学を受験する場合、大学の指定に従い2科目程度を受験。
- 英語(1科目)、歴史(2)、数学(2)、科学(3)、外国語(12)の計20科目で各200～800点。
- SATと同様、各科目61段階評価。

③ACT

- English (英語)、Math (数学)、Reading (読解)、Science (科学) の4領域。エッセイはオプション。
- 素点ではなく、各科目1～36点の36段階表示。エッセイは2～12点の11段階。
- 4領域の総合点は合計ではなく、1～36点の36段階表示。SATの1500点(平均)はACTの21点に相当。

イギリス

○GCE Aレベル

- 通常、各大学の指定する3科目程度を受験。
- 各科目、Aスター、A、B、C、D、E、不合格の7段階で表示。

フランス

○バカロレア

- 普通バカロレアの場合、必修10科目程度と自由選択科目(最大2科目)を受験。
- 各科目20点満点、平均10点以上でバカロレア合格。(自由選択科目は10点以上の場合のみ考慮)

ドイツ

○アビトゥーア(バーデン・ヴュルテンベルク州の場合)

- 論述試験4科目、口述試験1科目を受験。
- 各科目15点満点で評価。
- 科目試験の点数を300点満点、ギムナジウム最後の2年間の平常点を600点満点、合計900点満点に換算し、300点以上でアビトゥーア合格。

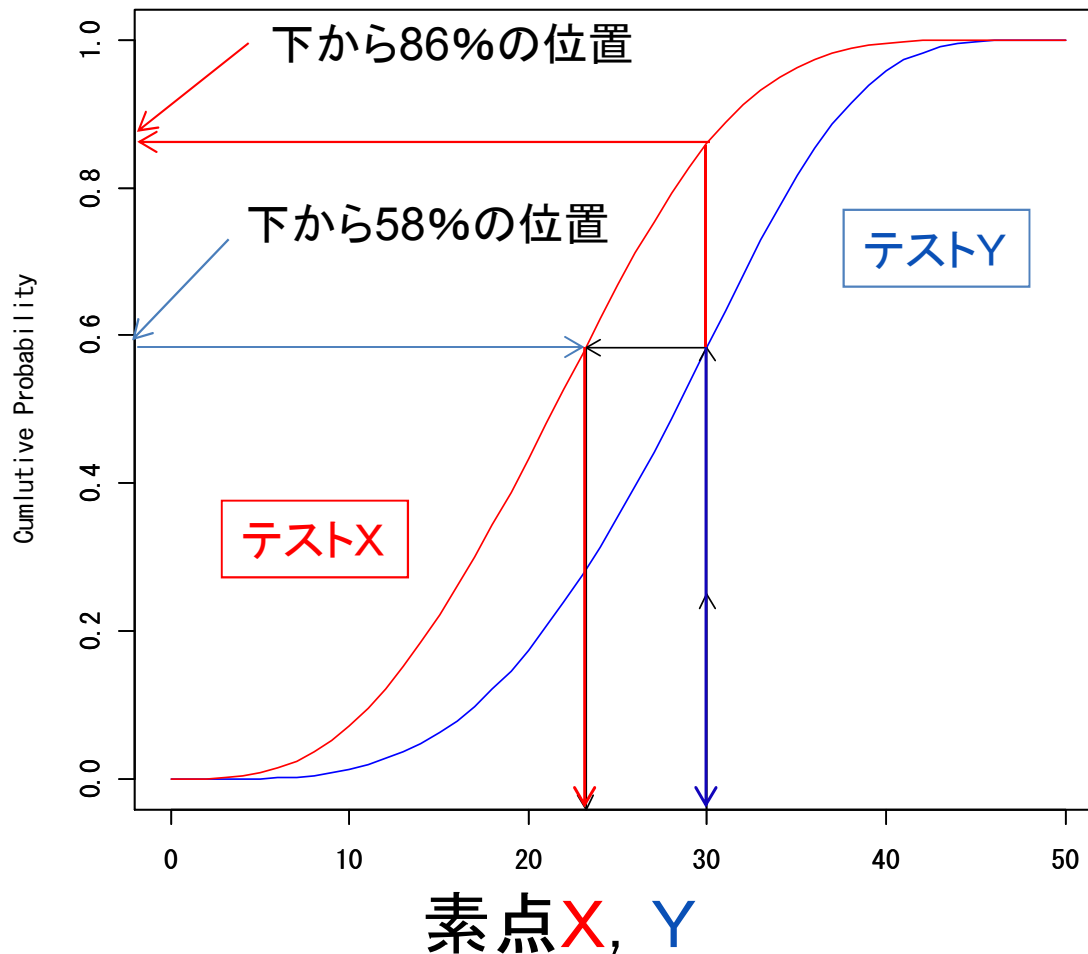
韓国

○大学修学能力試験

- 7領域46科目の中から各大学への出願に必要な科目を受験。
- 各科目ごとに標準化得点(偏差値)、百分位(パーセンタイル)、9等級の3種類の指標で表示。

パーセンタイル表示の原理

累積パーセント
(パーセンタイル・ランク)



1) 難易度の異なる2つのテストX,Yの素点データがある。

(説明のため、同じ受検者集団が両方のテストを受けた場合を想定。すなわち**テストXの方が難しい**と仮定。)

2) 点数の低い方から数えて、全体の58パーセントの位置にある素点を見つける(高い方から数える場合もある)

3) **テストX**に関する58パーセンタイルは**24点**

テストYに関する58パーセンタイルは**30点**

4) 逆にX, Yとも素点が30としたら、テストXの方が難しいので、

X=30は下から**86パーセント**に位置する。

Y=30は下から**58パーセント**に位置する。

ポイント: パーセンタイルとは、素点に相対的な位置情報を付加したものの分位数は100以外にも設定可能(4分位、10分位などなど)

SATの段階区分

SAT Reasoning TestはMath(数学), Critical Reading(読解), Writing(エッセイと文法)の3領域で構成されており各々200-800点の間で10点刻みで表示(61段階)。500点が平均となるように設計されている。合計2400点で181段階表示。

Math	Critical Reading	Writing	スコア表示
1	1	2	200
2	2	3	210
3	3	4	220
4	4	5	230
5	5	6	240
6	6	7	250
7	7	8	260
8	8	9	270
9	9	10	280
10	10		290
			300
			310
			320
			330
			340
			350
			360
			370
			380
			390
			400
			410
			420
			430
			440
			450
			460
			470
			480
			490
			500
			510
			520
			530
			540
			550
			560
			570
			580
			590
			600
			610
			620
			630
			640
			650
			660
			670
			680
			690
			700
			710
			720
			730
			740
			750
			760
			770
			780
			790
			800

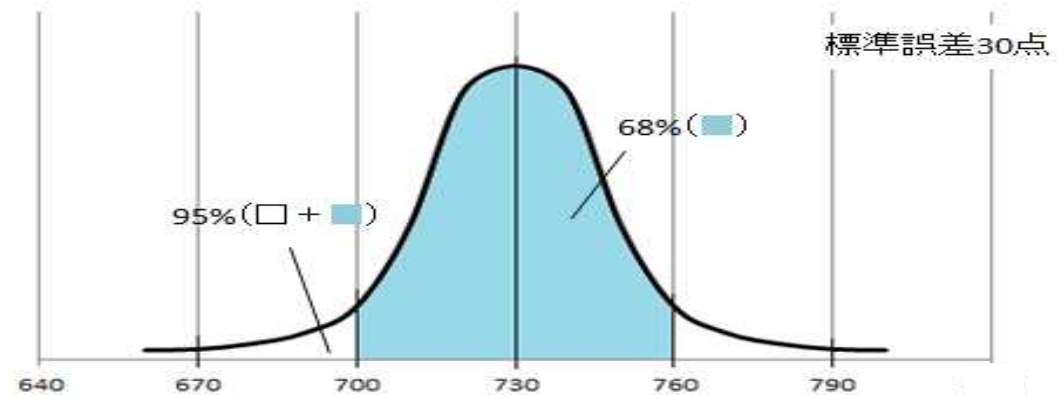
3領域合計

段階	スコア表示
1	600
2	610
3	620
4	630
5	640
6	650
7	660
8	670
9	680
10	690
11	700
	710
	720
	730
	740
	750
	760
	770
	780
	790
	800
	810
	820
	830
	840
	850
	860
	870
	880
	890
	900
	910
	920
	930
	940
	950
	960
	970
	980
	990
	1000
	1010
	1020
	1030
	1040
	1050
	1060
	1070
	1080
	1090
	1100
	1110
	1120
	1130
	1140
	1150
	1160
	1170
	1180
	1190
	1200
	1210
	1220
	1230
	1240
	1250
	1260
	1270
	1280
	1290
	1300
	1310
	1320
	1330
	1340
	1350
	1360
	1370
	1380
	1390
	1400
	1410
	1420
	1430
	1440
	1450
	1460
	1470
	1480
	1490
	1500
	1510
	1520
	1530
	1540
	1550
	1560
	1570
	1580
	1590
	1600
	1610
	1620
	1630
	1640
	1650
	1660
	1670
	1680
	1690
	1700
	1710
	1720
	1730
	1740
	1750
	1760
	1770
	1780
	1790
	1800
	1810



各領域のスコアに加え、領域を構成するサブスコアも表示・通知される。

測定値の標準誤差(正規分布の標準偏差)は30点。仮にスコアが730点であれば真のスコアが700-760点である確率が68%。670-790点である確率が95%。SAT Reasoning TestではMath(数学), Critical Reading(読解)においては60点違えば能力に違いがあると判断している。



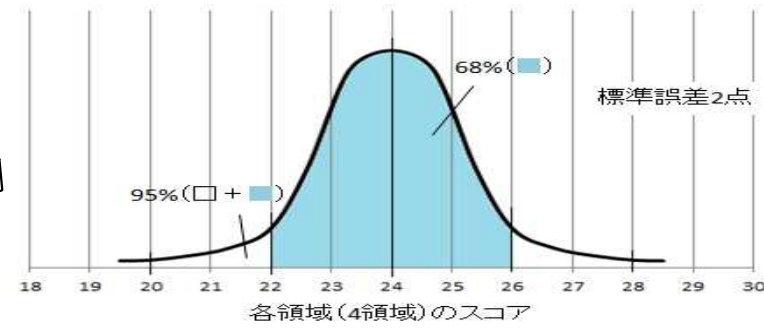
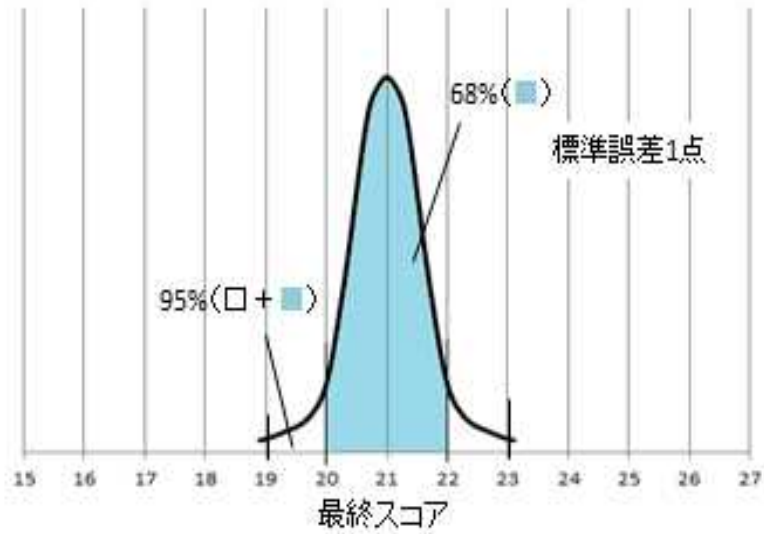
ACTの段階区分

ACT(The American College Testing Program)は、Math(数学)、English(英語)、Reading(読解)、Science(科学)の4領域及びComposite(全体)で構成されており、各々1-36点の36段階表示。オプション選択のWriting(エッセイ)は2-12点の11段階表示。4領域全体は点数の合算ではなく、1-36点の36段階表示。

スコア <点>	Science(科学) <パーセンタイル>	Reading(読解) <パーセンタイル>	Math(数学) <パーセンタイル>			
スコア <点>	全体	社会/科学	芸術/文学	慣用法/技法	修辭的技術	<単位>
36	36	36	36	36	36	
35	35	35	35	35	35	
34	34	34	34	34	34	
33	33	33	33	33	33	
32	32	32	32	32	32	
31	31	31	31	31	31	
30	30	30	30	30	30	
29	29	29	29	29	29	
28	28	28	28	28	28	
27	27	27	27	27	27	
26	26	26	26	26	26	
25	25	25	25	25	25	
24	24	24	24	24	24	
23	23	23	23	23	23	
22	22	22	22	22	22	
21	21	21	21	21	21	
20	20	20	20	20	20	
19	19	19	19	19	19	
18	18	18	18	18	18	
17	17	17	17	17	17	
16	16	16	16	16	16	
15	15	15	15	15	15	
14	14	14	14	14	14	
13	13	13	13	13	13	
12	12	12	12	12	12	
11	11	11	11	11	11	
10	10	10	10	10	10	
09	09	09	09	09	09	
08	08	08	08	08	08	
07	07	07	07	07	07	
06	06	06	06	06	06	
05	05	05	05	05	05	
04	04	04	04	04	04	
03	03	03	03	03	03	
02	02	02	02	02	02	
01	01	01	01	01	01	
平均	02	11	01	58	65	63
標準偏	01	03	10	01	49	52
平均	02	09	01	39	36	28
標準偏	01	03	01	01	01	02
平均	02	01	01	01	01	01
標準偏	01	01	01	01	01	01
平均	21.0	11.0	10.5	10.5		
標準偏差	5.3	3.6	2.9	3.1		

スコア <点>	Composite(全体) <パーセンタイル>
36	99
35	99
34	99
33	99
32	98
31	97
30	96
29	94
28	91
27	88
26	84
25	80
24	74
23	69
22	62
21	55
20	48
19	41
18	34
17	27
16	21
15	15
14	10
13	06
12	03
01	01
平均	21.1
標準偏差	5.1

【パーセンタイル】
 ※例えば、計測値として100個ある場合、5パーセンタイルであれば小さい数字から数えて5番目に位置し、50パーセンタイルであれば小さい数字から数えて50番目に位置し、95パーセンタイルであれば小さい方から数えて95番目に位置する。



※スコア(段階)は、等分位ではない。

IRT-CBTの運用例(公的試験)
医療系大学間共用試験
(2014年6月時点. 実施機関発行資料の概要)

1. 公益社団法人 医療系大学間共用試験実施評価機構（CATO）が運用
 1. 「国公立全80医科大学・大学医学部等，28歯科大学・大学歯学部が参加し，臨床実習開始前の学生の能力を全国的に一定水準に確保するために，大学間で共通の評価試験を実施することを目的として平成14年4月に創設された」
2. 試験はCBTとOSCEの2種類
 1. CBT: 知識の総合的理解力をコンピュータを用いた客観試験
 2. OSCE (Objective Structured Clinical Examination): 診療に参加する学生に必要な基本的診療技能・態度について，客観的臨床能力試験.
すなわち実技試験
3. 知識の総合的理解力(CBT)に関する試験について
 1. 試験の実施時期は各大学が年に1日定めてその日に実施
(大学ごとに異なる実施日)
 2. CATOはスコアを各大学へ提供
 3. 参加大学は，運用経費として学生1人あたり28,000円を機構に支払う
 4. 本試験に7,987人・再試験に344人が受験(2012年度)

医学系・CBT出題内容

ブロック	制限時間	問題数	出題形式	コア・カリキュラム	解答順
ブロック1	60分	60問	単純5肢択一形式	A～F	ブロック内での見直しが可能
ブロック2	60分	60問	単純5肢択一形式	A～F	ブロック内での見直しが可能
ブロック3	60分	60問	単純5肢択一形式	A～F	ブロック内での見直しが可能
ブロック4	60分	60問	単純5肢択一形式	A～F	ブロック内での見直しが可能
ブロック5	60分	40問	多選択肢2連問形式		ブロック内での見直しが可能
ブロック6	60分	40問	順次解答4連問形式		見直し不可
ブロック7			アンケート		
合計	360分	320問			

*1 出題数320問のうち240問が採点対象問題で80問が試行問題である

*2 コア・カリキュラムはA～Fまで順に「基本事項」「医学一般」「人体各器官の正常構造と機能, 病態, 診断, 治療」「全身に及ぶ生理的変化, 病態, 診断, 治療」「診療の基本」「医学・医療と社会」

*3 出題割合はA=4%, B=21%, C=38%, D=21%, E=8%, F=8%

*4 各ブロックが終わった後, 休憩時間を取る. ただし, 休憩時間については各大学で異なる

現在の項目数は10,000を超える

トライアル	第1回	第2回	第3回	最終
実施期間	H14年	H15年	H16年	H17年
提出項目数	9,919	9,322	7,108	7,219
採択項目数(%)	2,791(28.1)	3,723(40.0)	3,803(53.5)	2,440(33.8)
出題数	100	300	320	320
参加大学数(本/追)	77	80/30	80/38	未公開
受験者数(本/追)	5,693	7,185/518	7,727/701	未公開
採用項目数	2,305	2,908	3,875	未公開

- ✓ トライアルは項目の蓄積のみならず，実施体制，システム確認の意味を持つ。
- ✓ 実施時間は6時間である。
- ✓ 最終トライアルは，第1～3回までの項目特性の等化も目的としている。
- ✓ 項目の種類は，5肢択一項目，順次解答4連問，多選択肢2連問と用意されている。

作問フロー（医学系・CBT）

参加大学

1. 各大学医学部・歯学部で
問題作成
2. 各大学でのブラッシュアップ後に試
行問題提出

9. 各大学でCBT実施
(モニター派遣)

CATO(共用試験実施機構)

3. 機構委員による
ブラッシュアップ集中作業
4. 試行問題決定

5. 試行問題(採点対象外)+
6. プール問題(採点対象)の出題
7. 問題セット作成と調整作業
8. CBT実施キット準備・配布

10. 各大学からCBT実施キット回収
11. 機構で自動採点(能力値推定)

11. 各大学へ成績返却
12. 全国成績の公表
13. CBT解析結果の公表

- プール問題蓄積状況の検討
- 各プール問題の妥当性検討

- プール問題化

- 試行問題の事後評価作業
- 問題の特性評価,
プール問題候補決定

廃棄

医学系・CBTのブラッシュアップ委員会

1. 作問: 全国の約80の医学部それぞれにおおよそ100問(年)を作問するように依頼
2. 修正: ブラッシュアップ委員約150人(各大学2名程度ずつ派遣)が年4回, 2日間の委員会に参加し, ブラッシュアップをおこなう
3. ブラッシュアップ委員会では, 6~7人のチームを作って作業をおこなう



CBTブラッシュアップ作業 (医学系・歯学系)